序

福岡市は、古くから中国大陸や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区諸岡五丁目地内における共同住宅建設に先立ち実施した、笹原遺跡の第４次発掘調査について報告するものです。この調査では、主に古墳時代前期（３世紀後半～４世紀）の集落跡を検出し、同時期の土器や鉄器などが出土しました。集落跡には、何度も建て替えられた竪穴住居跡群や、方形に区画する環溝が確認されました。古墳時代の方形環溝には小規模な掘立柱建物が伴い、「首長居館」ないし「祭祀場」の可能性が考えられ、継続的な祭祀が行われていたことが明らかになりました。また竪穴住居の一つには、当時まだ普及していなかった竈（カマド）が設置されたものが検出されました。これらの調査成果は、当遺跡が地域の歴史において重要なものであることを示す貴重な資料となっています。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げる次第であります。

平成26年３月24日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が、平成24年10月15日から同年11月21日まで発掘調査を実施した、共同住宅の建設に伴う、笹原遺跡第４次調査の報告書である。なお、発掘調査費用は一部に国庫補助金を適用している。
2．発掘調査は、共同住宅建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行ったが、建物本体工事以外の擁壁工事や配管工事に伴う工事立会の確認調査が生じ、遺構に影響が及ぶ工事立会部分の一部については発掘調査対象としている。工事立会による確認調査部分は、上面確認のみを行い、地下に遺構を保存している範囲がある。
3。遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をＳＤ、竪穴建物（竪穴住居）をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、土坑をＳＫ、柱穴などピット状遺構をＳＰ、その他の遺構（不明遺構、特殊遺構、近代以降の攪乱）をＳＸとした。
4．本書の遺構図に用いる方位北は、特に断りがないものは磁北である（本文中は真北とした）。磁北は西偏約６°20′として、図面によっては真北を求めている。調査地付近の国土座標点が不明であったので、調査地周囲を測量して福岡市道路台帳地図に調査区を入れている。また調査区内の標高は、道路台帳地図のレベルから移動して用いている。
5．本書に用いる遺構図の作成は、主に調査担当の久住猛雄（福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課）および、中尾祐太・髙橋幸作（当時・西南学院大学大学院）、榎本義嗣（埋蔵文化財調査課）が行い、一部を常松幹雄（埋蔵文化財調査課）、吉留秀敏（故人）・菅波正人（当時・埋蔵文化財調査課）が行った。遺物の実測は、土器を朝岡俊也（福岡大学大学院）、久住が行ったほか、穂園さやか（福岡大学）の協力を得た。石器の実測は田上勇一郎（埋蔵文化財センター）、朝岡が行った。鉄器は久住が実測した。製図は、久住、朝岡、上方高弘（埋蔵文化財調査課臨時職員）、松下伊都子（整理作業員）が行った。本書に用いる遺構写真および遺物写真は、全て久住が撮影した。
6．本書の執筆と編集は久住が行った。
7．本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．調査の記録 …… 5
　１．調査の概要 …… 5
　２．検出遺構 …… 8
　３．出土遺物 …… 28
図版（PL.） …… 29

報告書抄録

ふりがな	ささばる３―ささばるいせきだい４じはっくつちょうさほうこく―
書名	笹原３
副書名	―笹原遺跡第４次発掘調査報告―
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1224
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目8-1　電話番号　092-711-4667
発行年月日	西暦2014年３月24日

遺跡名ふりがな	ささばるいせきだい４じちょうさ
遺跡名	笹原遺跡第４次調査
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくもろおか５ちょうめ69ばんちない
遺跡所在地	福岡市博多区諸岡五丁目69番地内
市町村コード	40130
遺跡番号	0103
北緯	33度33分19秒（世界測地系）
東経	130度27分8秒（世界測地系）
調査期間	2012.10.15～2012.11.21
調査面積（㎡）	181.52㎡（住宅建設部分本調査範囲＋工事立会後本調査範囲）※工事立会による上面確認調査範囲を含めば223.70㎡
調査原因	共同住宅建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代、古墳時代	溝２条（方形区画環溝と想定）、竪穴住居４棟以上（うち２棟で建替痕跡）、土坑５基、ピット（柱穴ほか）多数、掘立柱建物７棟前後（いずれも小規模）および門柱遺構（方形区画環溝陸橋部）	土師器（古墳時代前期初頭～中期前葉）が大部分、弥生土器（中期前半～後期初頭）、凹石、剥片石器類（弥生時代前半期？、黒耀石＞安山岩）、鉄製品（鉄鏃など、古墳時代前期～中期前半）、中世土師器片、近世陶磁器片、赤色顔料、楽浪土器片？	・溝２条は同一軸上にあり、その間は陸橋状となる。この部分に門柱遺構の可能性がある２本柱の組合せが認められる。 ・溝２条は工事立会調査の結果、いずれも西側へ屈曲して巡ることが判明した。溝の芯々で南北18m、東西16～16.5m前後の方形区画環溝になると推定される。さらに北辺中央は溝が「突出部」を呈する可能性がある。同様の遺構は、古墳時代の首長層居宅（首長居館）や祭祀場とされるものであり、本例についても比較検討の必要がある。推定方形区画の西側は未調査だが、今回の調査区の状況からみる限り、区画内部には小規模な柱穴が分布し、複数の掘立柱建物が復元可能である。柱穴のサイズから見て、仮設的な建物が何度か建てられた可能性がある。 ・方形環溝の方位軸は、北側の諸岡丘陵を意識している可能性がある。 ・出土土器から、方形環溝の存続期間は古墳時代初頭から中期前葉と長期間に及ぶ。少しずつ埋没しながらも、必要時に少し掘り直して区画溝として使用したことが観察された。溝の時期幅は、周囲の竪穴住居の存続期間にほぼ一致する。 ・環溝では、土器の廃棄祭祀が下層から上層にかけて複数回みられ、様式変化がたどれる。存続期間の長さ、小規模な仮設建物しかないことを考慮すると、「首長居館」よりも「祭祀場」であった可能性がより高い。 ・竪穴住居は、同一箇所で１回から複数回建替えしているものがあり、かつ継続的に重複している。 ・竪穴住居の一つには、建替え後にカマドを構築したものがある。古墳時代前期の竪穴住居におけるカマドの検出は、当該期のカマドが多数存在する西新町遺跡を除くと、博多遺跡群、南八幡遺跡、前原西町遺跡の各例に続くものである。当該例は、ベッドの内側コーナー部に構築しているところが異例である。 ・別の竪穴住居は、焼土を含む炉状の凹みや小土坑が床面に６ヶ所みられた。複数回の建替えと関わる可能性がある。このうち１ヶ所は炉の焼土ではなく赤色顔料（ベンガラ）を納めていた可能性がある。

調査基本情報一覧表

遺跡名	笹原遺跡	調査次数	４次	調査略号	SSB-4
調査番号	1225	分布地図図幅名	25．井尻	遺跡登録番号	020103
事前審査番号	24-2-466	調査原因	共同住宅建設	敷地面積	703㎡（地番全面積）
調査期間	平成24年（2012年）10月15日～同年11月21日			工事面積	140.75㎡（住宅建設範囲）
調査地	福岡市博多区諸岡五丁目69番地			調査面積	181.52㎡ （住宅建設範囲＋立会後本調査範囲） ※工事立会による上面確認調査範囲を含む場合は223.70㎡

笹　原　3

―笹原遺跡第４次発掘調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1224集

2014年３月24日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目8-1

印　刷　魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、博多区諸岡五丁目69番地内における共同住宅建設工事に伴う、文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年（2012年）８月17日付で受理した（事前審査番号24-2-466）。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である笹原遺跡（分布地図番号25-0103）の範囲内であり、当該地はすでに平成10年７月９日に試掘調査が実施されており（事前審査番号10-2-118）、地表下32～38㎝で遺構（埋蔵文化財）が存在することが確認されていた。埋蔵文化財審査課事前審査係は、今回の照会時に申請された工事内容の場合には、埋蔵文化財に影響することが確実と判断し、その保全等について申請者と協議を行った。

その結果、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないとの結論に至り、共同住宅建設工事対象部分についての記録保存のための発掘調査を実施することで申請者の合意を得た。そして、平成24年10月12日付で、個人事業者を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。発掘調査は福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課がこれを行うこととなり、同年10月15日から発掘調査を行い、翌平成25年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

発掘調査は平成24年10月15日に着手した。発掘調査終盤には、当初設定した発掘調査範囲（共同住宅建設工事範囲）以外にも、擁壁工事および配管工事等の付帯工事が地表下の埋蔵文化財に影響する可能性が懸念されたため、委託者と協議の上、工事立会に伴う遺構確認調査を併行して実施し、予定工事が遺構に影響する範囲については発掘調査を追加して実施した。発掘調査は平成24年11月21日に終了した。

２．調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成24年度、資料整理・報告書作成：平成25年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財調査課　課長　宮井善朗

同課調査第１係長　常松幹雄

庶　　務：埋蔵文化財審査課　管理係長　和田安之

管理係　川村啓子

事前審査：埋蔵文化財審査課　事前審査係長　加藤良彦

同課主任文化財主事　佐藤一郎

同課事前審査係文化財主事　森本幹彦

調査担当：埋蔵文化財調査課　同課調査第１係文化財主事　久住猛雄

なお文化財部は、組織改編のため平成24年４月１日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

３．遺跡の立地と歴史的環境

笹原遺跡は、福岡平野の中央部、那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた段丘上および諸岡川左岸の沖積微高地または谷底平野に立地する遺跡である。調査地点は遺跡推定範囲の北部に位置し、阿蘇４火砕流起源の八女粘土・鳥栖ローム層が覆う段丘の低位面である。福岡平野南部の春日丘陵上にある白水大池に源を発し、北西に流れ御笠川に合流する諸岡川は、牛頸山麓から延びる段丘を開析し、河道の周辺に谷底平野を形成している。笹原遺跡の範囲のうち、中央から南・西側の大半はこの谷底平野

とその間にある沖積微高地上に立地し、元は笹の生い茂る原野である。記録では新田開発されたのが寛永九年（1639年）であり、低湿地であったためか水田開発が遅れた可能性がある。笹原遺跡１次（福岡市埋蔵文化財調査報告書第359集）および３次調査地点（同第662集）はこの範囲である。３次調査地点では、蛇行する諸岡川の旧河道が検出された。一方、遺跡北部にある２次および本報告の４次調査地点は低位段丘にあり、むしろこの範囲は、北西側の諸岡Ｂ遺跡が立地する諸岡丘陵に続く立地である。２次調査（第642集）の結果、笹原遺跡はそれまでの想定よりも北にやや広がることになり、北側にある諸岡Ｂ遺跡との間は狭まった。以下、主に弥生時代から古代に焦点をあてて周囲の遺跡を概観する。

諸岡Ｂ遺跡の丘陵部には古墳群があり、北側に径20m以上の２号墳が現存し（斜面を背にする立地で、7世紀代と考えられ、時期的には大型円墳）、また神社で削平されているが、後円部の一部と墳丘裾部がわずかに残る３号墳がある（東側裾部ラインから全長25m前後の前方後円墳の可能性あり）。この南側に４号墳の残欠がある。２号墳は周囲で埴輪が出土・採集され、５世紀末～６世紀初頭（TK47～MT15期）であろう。この丘陵には、かつて忠魂社があった丘陵中央部から、頂部西南側斜面に連なる甕棺墓群と（Ｂ群）、やや下った西側斜面から南側に延びる甕棺墓群（Ａ群）がある。Ｂ群には、かつて丘陵中央の忠魂社造営時に細型銅剣と貝輪が出土したといい、３号墳西側の３次調査でもゴホウラ製貝輪８個が出土した甕棺がある。一方、Ａ群でもゴホウラ製貝輪１点が出土している。丘陵部北東裾部の５次調査では、弥生時代前期末（板付Ⅱｃ式）に伴う円形粘土帯期の朝鮮半島系無文土器が多数出土しており、渡来人

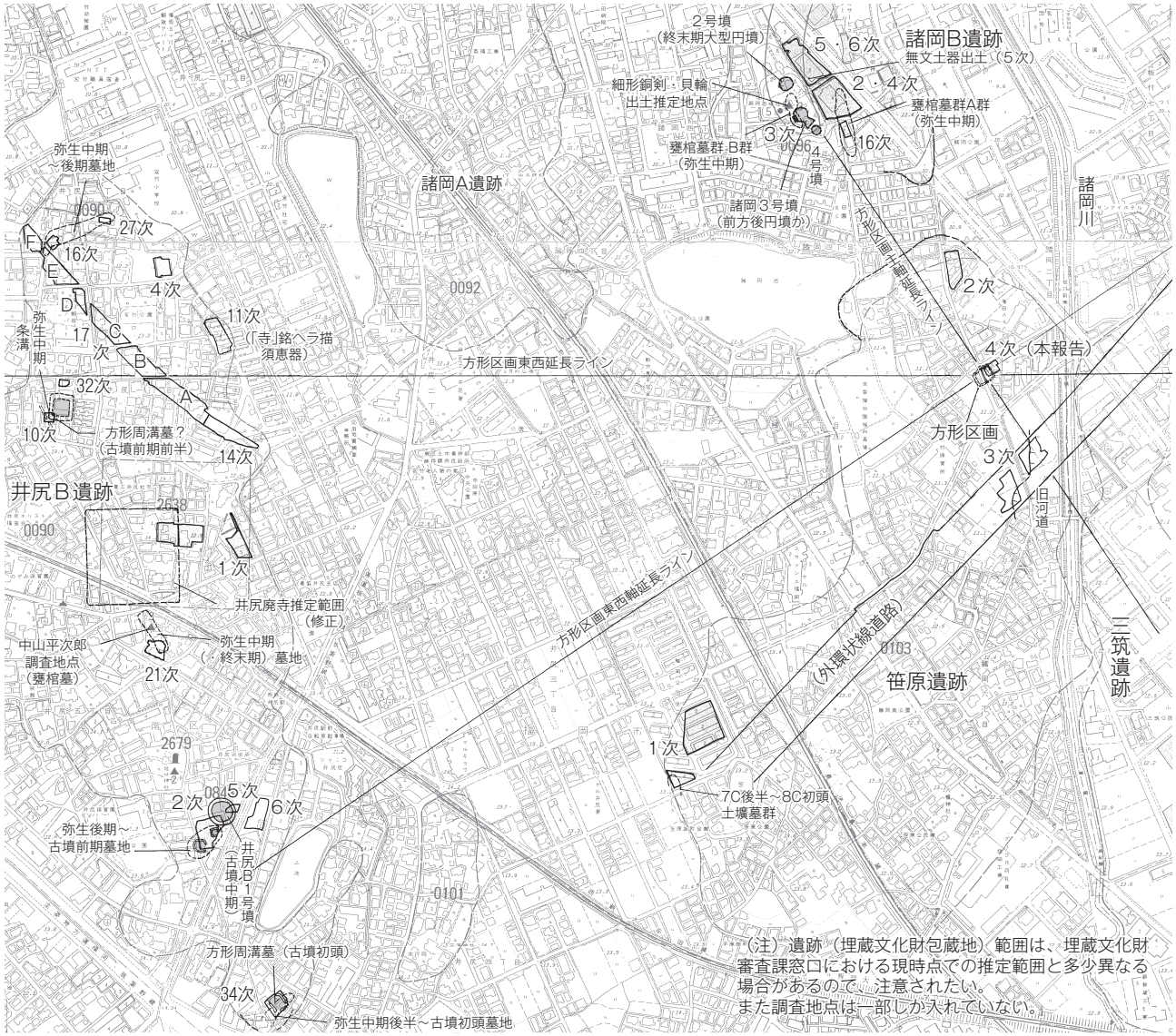


Fig.1　笹原遺跡の位置と周辺の遺跡（1/8,000）

の存在が推測されているが、当時の拠点集落であった板付遺跡の縁辺部であることも注意される。

笹原遺跡に戻ると、２次調査では古墳時代初頭から前期前半を主とし、中期前葉を下限とする竪穴住居群が検出されている。４次調査の環溝出土土器群や竪穴住居群の時期幅とほぼ一致しており、遺跡北部には同時期の集落が広がっているものと推定される。遺構は不明だが、弥生時代前期と推定される石器もある。１次調査では、多くは時期不詳のピット・土坑群が検出されている。その中で遺物出土した土坑は、７世紀後葉～８世紀初頭の須恵器・土師器を伴い、土壙墓の可能性がある。笹原遺

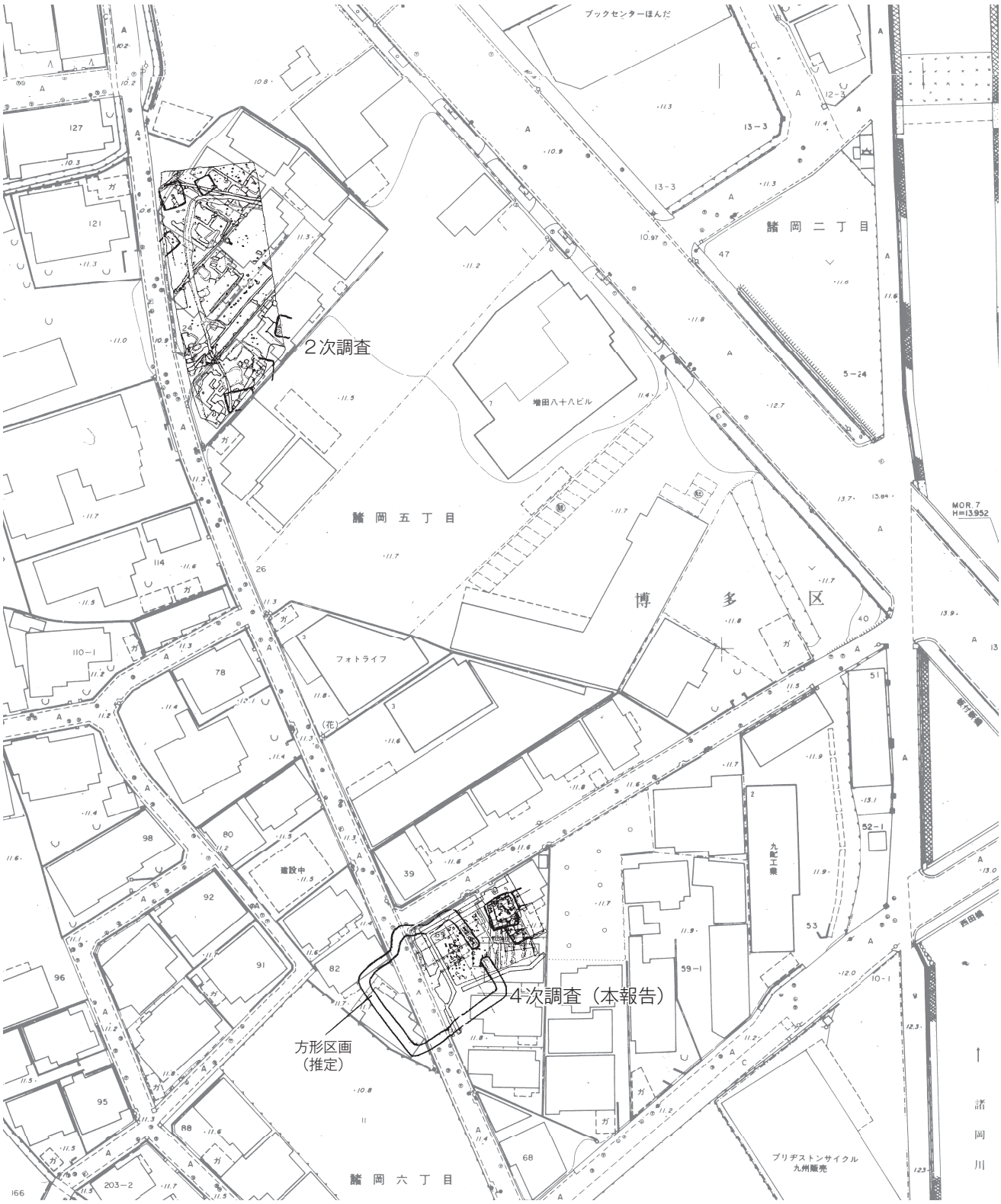
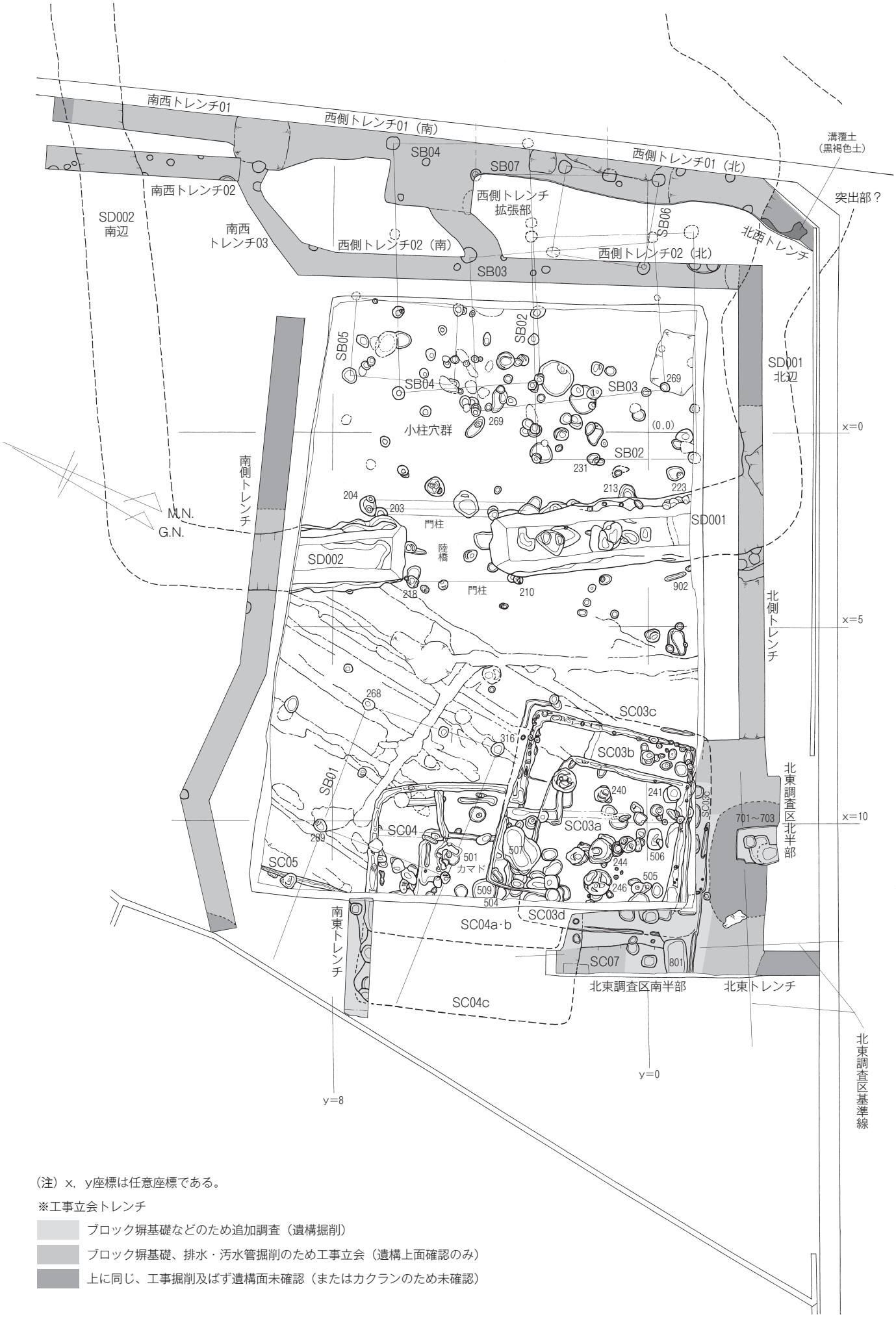


Fig.2　笹原遺跡４次調査地点位置図（1/1,000）



（注）x，y座標は任意座標である。

※工事立会トレンチ

ブロック塀基礎などのため追加調査（遺構掘削）

ブロック塀基礎、排水・汚水管掘削のため工事立会（遺構上面確認のみ）

上に同じ、工事掘削及ばず遺構面未確認（またはカクランのため未確認）

Fig.3　調査区全体図（1/125）

跡では同時期の集落遺構は未検出だが、谷部を挟んだ西側の井尻Ｂ遺跡には、７世紀第４四半期から８世紀初頭を前後する時期に、基壇盛土がある推定寺院跡（「井尻廃寺」）、官衙域、倉庫域、集落域が、正方位を指向する条溝や道路遺構を伴い、計画的に配置されたような拠点的な集落であることが判明している（第923集、井尻Ｂ22次報告参照）。笹原１次の沖積微高地から低湿地に営まれた土坑群は、飛鳥時代末期前後の井尻Ｂ遺跡に関わる土壙墓群の可能性が考えられる。

笹原遺跡と井尻Ｂ遺跡の関係性は、本報告４次地点における古墳時代前期「方形環溝」の経営主体の墳墓位置の候補という点でも注目される。井尻Ｂ遺跡は、弥生時代早・前期に散発的に遺物があるが、その本格的な遺構の展開は、段丘上で井戸の掘削や竪穴住居群の展開が始まる中期前葉（須玖Ｉ式期）以降である。中期前葉から後期前葉までは遺跡の主に北半部に集落・墳墓遺構が分布するが（後期に断絶時期は無い）、南半部にも一定の分布がある。南半部は後期前葉までの集落遺構の分布域が限られるが、下記のように墓域もあり、集落としても後期以降に継続している。後期中葉以降、古墳時代初頭までは遺跡範囲の多くに遺構が広がり、拠点的な大集落として南北が一体化する。しかし古墳時代前期前葉にやや遺構数が減少し、前期後半以降は集落が消滅する。弥生時代中期の甕棺を主体とする墓域は、北半部では17次Ｅ区・16次から27次（第1136集）にかけて広がり、27次地点では、後期には多くにベンガラを伴う土壙墓群に移行する（推定後期後半以降の建物に切られる）。南半部の北端では、21次（第788集）付近に甕棺墓群があり、後期の土壙墓？（21次SD002、SK009？）や終末期の土壙墓もある。南半部南端の34次（第1106集）では、中期後半～後期初頭の甕棺墓群・土壙墓（SR11?）の展開後、古墳時代初頭には土壙墓・木棺墓・石蓋土壙墓からなる墳墓域となる（後期の土坑SK02・10・13も土壙墓の可能性あり）。同時期に方形周溝（SD07・08・09）があるが、墳墓域に築造され、周溝覆土内埋葬（SR12,SR06）や周溝と直交して重複（SR05）、周溝方位と並行（SR17）して墳墓が築かれるから、方形周溝も中央の主体部が削平された周溝墓（一辺15m前後の方墳）とするのが妥当だろう（溝出土土器からＩＢ期ないしⅡＡ期の築造か）。北半部の10次地点（第678集）で検出された幅広のＬ字状溝は、古墳時代前期前葉（ⅡＣ期）の大型方形周溝墓（一辺20m前後か？）の隅角部であろう。３次地点（第411集）には土壙墓・石蓋土壙墓群があるが、上限が後期後葉とみられる。水銀朱とベンガラが伴う墳墓群は、類例から後期後葉から古墳時代初頭の特定集団墓であろう。ベンガラのみの石蓋土壙墓２基は、この地点では古墳前期に下る可能性が高い。さらに方形周溝（一辺8m）で囲まれた16号土壙墓（ベンガラ撒布）は、本来は石棺墓ないし小石室の可能性があり、古墳前期後半頃であろう。３次では他に周溝墓の可能性がある弧状溝（SD01）があり、周囲に古墳前期の周溝墓群が展開している可能性がある。この延長として、古墳中期中葉に埴輪と初期・古式須恵器（TK216～TK208併行）を伴う井尻Ｂ１号墳（径25m）が築かれるのだろう。井尻Ｂに展開する古墳時代初頭から前期の墳墓は、笹原４次の方形環溝との関係を考慮する必要がある。井尻Ｂの集落がやや衰退する前期前葉（ⅡＢ期～ⅡＣ期）にやや先行するが、笹原遺跡北部の集落は古墳初頭（ⅡＡ期）からその形成が始まり、井尻Ｂから漸移的に分かれてきた集団の可能性が考えられるからである。

（註）古墳時代前期の編年は、久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ＸⅨ、による。

Ⅱ．調査の記録

１．調査の概要

調査地点は笹原遺跡の北部にあり、段丘低位面にある。現在の敷地標高は11.5～11.8mである。近現代の盛土を除去した地表下20～40㎝の浅いレベルで鳥栖ローム層上面となり遺構を検出した。調査

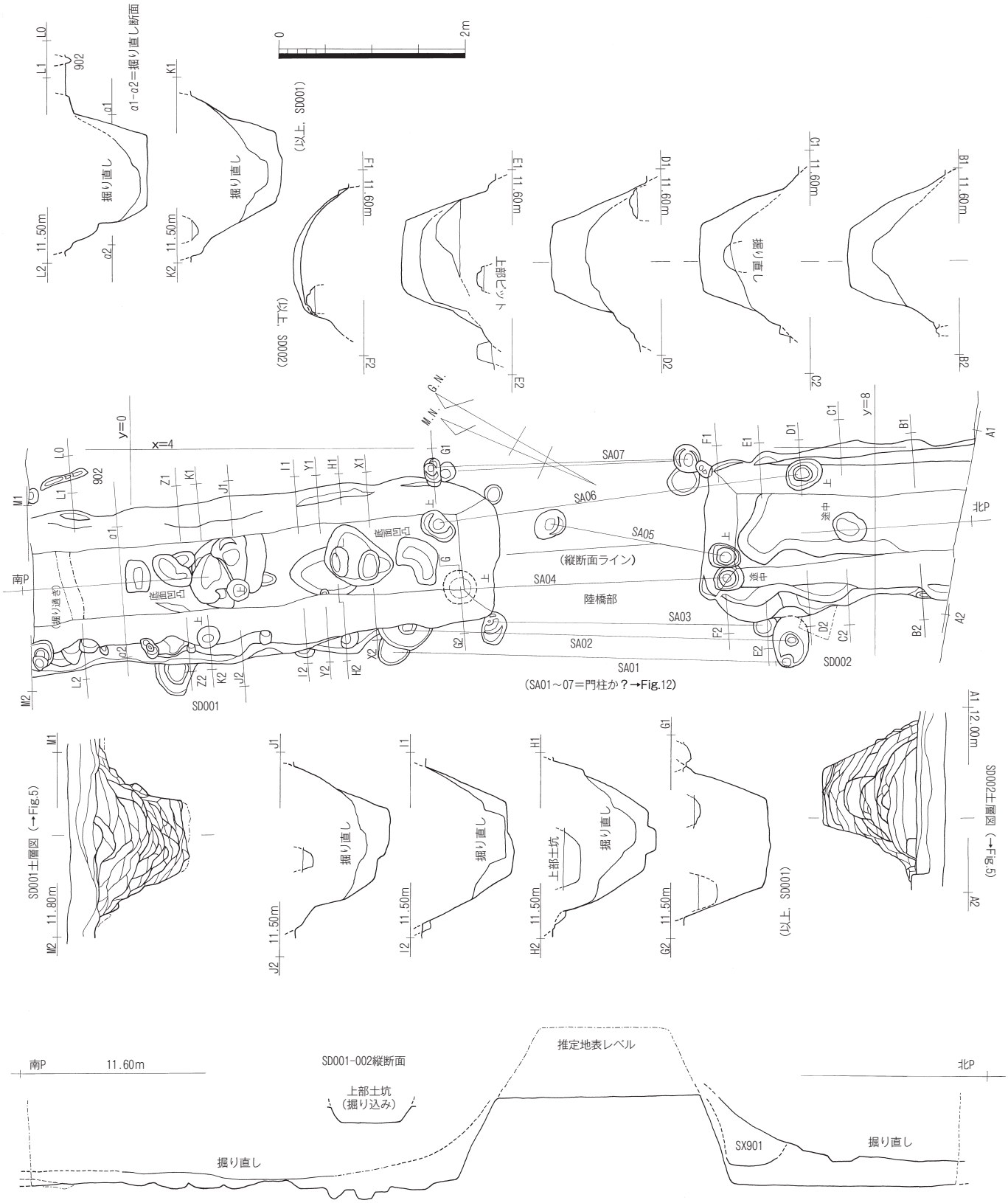


Fig.4　SD001（左）・SD002（右）実測図（1/60）

では廃土置場が敷地内に十分確保できたので、調査区を反転していない。遺構の覆土は、黒褐色から暗褐色土が主体である。遺構の大半は古墳時代前期～中期前半と考えられる。淡い褐色土のピットもあるが、これは近世に下ると考えられる。

検出遺構は、溝２条（方形環溝になると推定）、竪穴住居４棟以上（うち２棟部分で建替痕跡あり）、土坑５基、ピット（柱穴ほか）多数である。遺構は、調査区中央を略南北（ＧＮ－32～34°－Ｗ前後）に走る溝状遺構を境に東西で分布様相が違い、西側は小規模なピット群、東側は竪穴住居群となる。溝

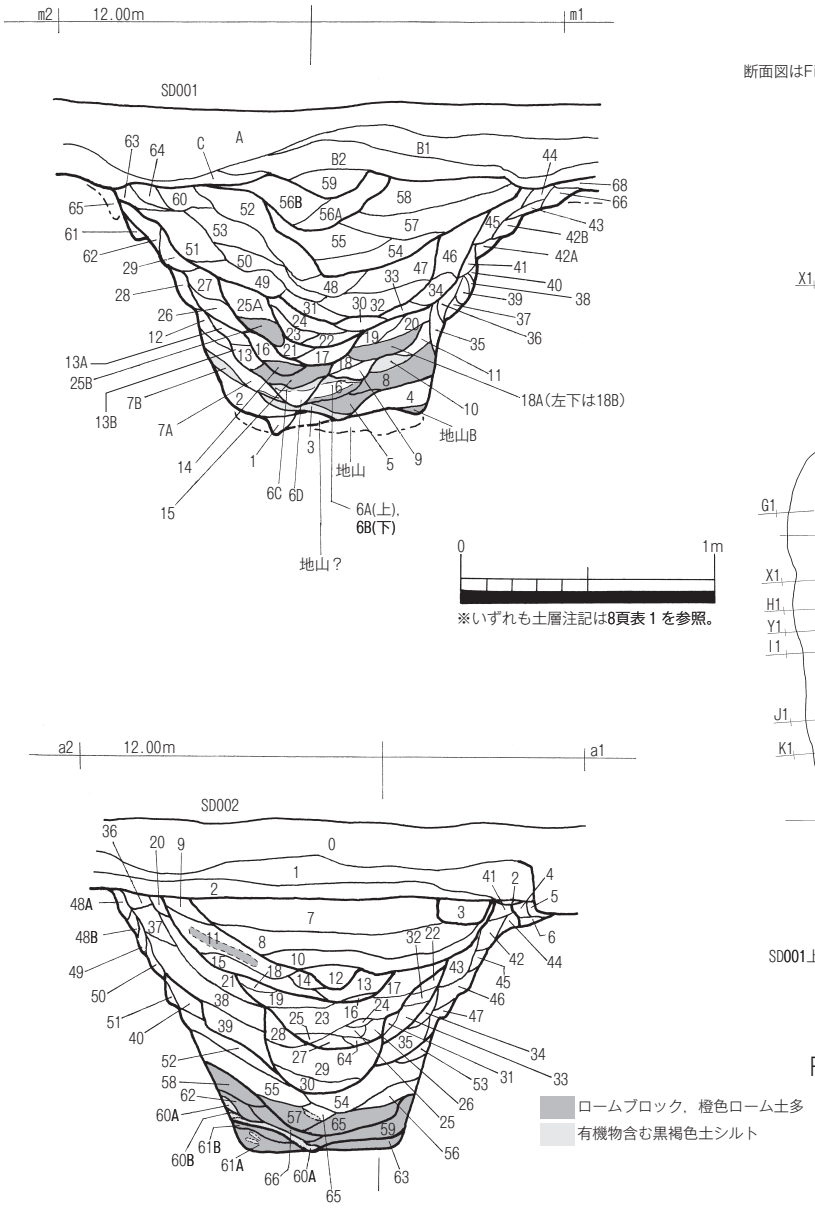


Fig.5　SD001北壁（上）・SD002南壁（下）土層断面図（1/30）

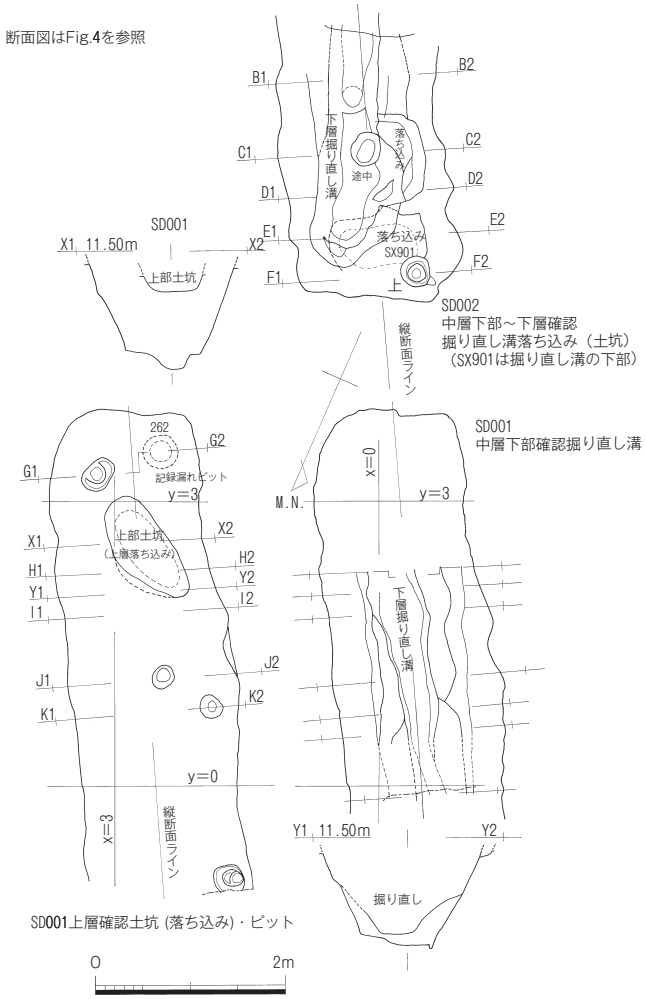


Fig.6　SD002・SD001掘削途中確認遺構実測図（1/80）

SD001とSD002の掘削時期は、最下層に近い土器群から前期前葉（ⅡB期）以前に遡るが、溝は埋没しながらも何度か掘り直しを行い、長期間機能したことが分かる。溝は方形区画環溝となり、北西側の工事立会部分の観察から方形環溝の北辺中央に「突出部」がある可能性が高い。溝の東側は、竪穴住居群までの間が遺構が希薄な帯状空間となる。竪穴住居群は、SC003、SC004、SC005と、工事立会追加調査で確認したSC007がある。SC004はSC003に切られ、またSC006はその両者に切られている。最も古いSC006は、北側壁際の屋内土坑から多量の土器が出土し、前期初頭（ⅡA期）である。SC003・004・006はいずれも貼床によるベッドを付設する。SC004には、ベッド南東隅角内側にカマドを検出したが、下部に古相の柱穴があり、建替え後らしい。またSC003の床面には、炉の可能性がある焼土ないし炭粒が集中する凹みや浅い土坑が６箇所も検出されたが、建替え（３回以上）に対応するものか、機能が異なる施設かは不詳である。竪穴住居群は密集し、調査区東側に続くとみられる。

出土遺物は、パンケース９箱分で、古墳時代前期から中期前半の土師器が大部分である。溝出土土器が多く接合し、箱数で示すより遺物が多い印象である。他に、弥生時代中期～後期の弥生土器、黒曜石剥片石器、古墳時代前期～中期前半の鉄製品（鉄鏃など）数点、中世土師器片や近世陶磁器片が僅かにある。また竪穴住居から赤色顔料（ベンガラ？）を含む可能性がある土を検出している。弥生土器や黒曜石剥片石器は、古墳時代遺構に混入し、その時期の遺構はみられないが、北側の諸岡Ｂ遺跡には弥生時代前・中期の遺構群があり、本遺跡にも当該期の遺構が多少分布していたのであろう。

ＳＤ001 北壁土層注記（Fig. 5）

（略称：ローム→ロ，ブロック→B，粒子→粒，焼土→焼，しまり甘い→し１，しまりやや甘い→し２，しまりふつう→し３，しまりややあり→し４，しまりあり→し５，しまりあり堅い→し６，粘性→粘，土器片→器片，「○○色」の「色」は省略，以下他の掲図の土層注記も同じ。）

1．極暗褐土＋ロＢ　／3．極暗褐土主＋褐土＋ロＢ少
2．暗褐土＋褐土＋ロＢのラミナ状
4．暗褐土40%＋にぶい黄褐・橙ロ50%強＋褐土少
5．汚れたロームにぶい黄褐土＋褐土40%
6Ａ・6Ｄ．黒有機物含む暗褐土80%＋ロＢ，し１～２
6Ｂ．黒有機物含む暗褐土50%＋ロＢ40%以上，し２
6Ｃ．黒有機物含む暗褐土70%強＋ロＢ20%，し１～２
7Ａ．暗褐土＋ロ少，器片少，し２
7Ｂ．暗褐土＋ロ橙土B50%，し４
8．ロ黄褐～橙土・にぶい橙土40%＋にぶい褐土60%ラミナ状混合，黒褐・暗褐土10%
9．黒有機物含む暗褐土40%，ロ橙褐土50%
10．極暗褐土＋ロ小Ｂ少　／11．暗褐土＋ロ橙褐土25%
12．暗褐土50%＋ロＢ10%＋褐土40%
13Ａ．極暗褐～暗褐土＋ロ橙土若干
13Ｂ．（極暗褐～）暗褐土＋ロ橙土10%（13Ａより多）
14．褐土＋ロ小Ｂ30%　／16．極暗褐土＋ロ粒・小Ｂ少
15．ロ黄褐～橙土主体＋褐土汚れ斑状20%
17．黒褐土，混じり少，し５，器片少
18Ａ．暗褐～褐土50%以上＋ロ橙褐土30%＋ロ橙土10%ラミナ状混合
18Ｂ．暗褐（～褐）土主体＋ロ橙褐土15%（18Ａより暗）
19．極暗褐～黒褐土＋ロ粒少
20．極暗褐～暗褐土＋ロ粒若干
21．25Ｂ～21～17と漸移，黒褐～極暗褐土＋ロ粒少
22．極暗褐（～暗褐）土＋褐土・ロ粒混じり少
23．（黒褐～）極暗褐土＋ロ粒少
24．黒褐土＋ロ粒少，し２～４，器片少
25Ａ．暗褐～極暗褐土＋ロ粒やや含（5%），25Ｂより明
25Ｂ．極暗褐土，ロ粒主か混じり少
26．極暗褐～暗褐土，ロ粒・小やや多（10%）
27．（黒褐～）極暗褐土＋ロ粒少
28．暗褐（～褐）土＋ロ橙土40%
29．極暗褐土主体＋褐土斑状30%
30．極暗褐土＋ロ粒やや多（10%）
31．極暗褐～黒褐土＋ロ粒少，32へ漸移
32．極暗褐土＋ロ粒若干，31より明
33．極暗褐（～黒褐）土，34より褐土気味，32より暗
34．黒褐～極暗褐土＋ロ粒少，し２
35．暗褐土50%＋にぶい褐土20%＋ロ橙褐土(やや暗)30%，11より明　／37．ロ橙土崩落＋褐土汚れ20%
36．暗褐土＋ロ橙褐土30～40%，35より明
38．暗褐～極暗褐土＋ロにぶい橙褐土20%（やや暗）
39．極暗褐～暗褐土＋ロ粒やや多（5%），34より明，38より暗　／40．ロ黄褐～橙土崩落＋にぶい褐土60%
41．極暗褐～暗褐土＋ロ橙褐土（汚れたローム）25%
42Ａ．ロ橙土＋褐土汚れ若干　／42Ｂ．ロ橙土＋褐土40%
43．暗褐～極暗褐土＋ロ橙土B30%
44．極暗褐土＋暗褐土20%，＋ロ橙土小Ｂ・ロ粒ややあり，し５
45．極暗褐土＋暗褐～にぶい褐土30%＋ロ粒微少，し５
46．極暗褐（～黒褐）土＋ロ粒少，し４
47．黒褐土＋ロ粒若干（ややあり），し２～３
48．黒褐～極暗褐土＋ロ粒やややあり，器片あり
49．極暗褐～暗褐土＋ロ粒・ロ（やや暗）橙褐土小Ｂやや多（10%）　／52．極暗褐土＋ロ粒少，器片少，し５
50．極暗褐土（＋黒褐土少）＋ロ粒少，器片少，49より暗
51．暗褐～極暗褐土，し５，49より暗，50・52・53より明
53．極暗褐土＋ロ粒少，砂レキ微少，60より暗
55．極暗褐～黒褐土＋ロ粒少，小砂レキ微少，し２
56Ａ．暗褐土＋ロ粒微少，砂レキあり，器片あり
56Ｂ．極暗褐～暗褐土＋ロ粒微少，砂レキあり，より暗
57．極暗褐土＋ロ粒少，器片少，55より明
58．極暗褐土主体＋暗褐～褐土20%混じり＋ロ粒・ロにぶい淡黄褐土B5%，し５　／54．黒褐土＋ロ粒少
59．Ｂ１・Ｂ２層＋極暗褐土B30%，カク乱層
60．暗褐～極暗褐土＋ロ粒微少，炭粒微少，砂レキあり
61．ロ黄褐土＋（暗褐～）褐土汚れ40%
62．にぶい褐～淡暗褐土＋ロ粒少　／63．暗褐土
64．極暗褐土＋ロ明褐土Ｂ10%
65．暗褐～褐土＋ロ橙土Ｂ30%，根？
66．暗褐～にぶい褐土＋ロ橙～黄褐土小Ｂ10%
68．にぶい褐土＋ロ小Ｂ若干＋Ｂ層赤茶褐真砂土混入
Ｂ２．酸化鉄沈殿で赤くなった茶褐シルト＋小砂レキ含む＋黒土小Ｂ少，耕作床土層　／Ｃ．Ｂ１～Ｂ２層漸移
Ｂ１．にぶい（暗）灰褐砂質シルト＋小砂レキ，耕作土
Ａ．灰白色真砂土＋瓦礫含む（＝ＳＤ002－０層）

ＳＤ002 南壁土層注記（Fig. 5）

1．ＳＤ001 北壁Ｂ１層（より暗），耕作土
2．ＳＤ001 北壁Ｂ２層（より赤い），床土層
3．２層＋黒褐～極暗褐土B30%，し３～４
4．暗褐（～極暗褐）土＋にぶい明褐土20%＋ロ粒若干
5．（にぶい）褐～やや暗い褐土＋ロ粒若干，４より明
6．ロ（にぶい）橙～赤褐土＋暗褐土40%，し４，粘あり
7．黒褐～極暗褐シルト土＋ロ粒若干，器片少，し５
8．極暗褐土＋ロ粒少，器片微少，し４～５，15より暗
9．極暗褐土＋ロ粒少，炭粒微少，し２～３
10．黒褐～極暗褐土＋ロ粒・ロ小Ｂ若干，し２～３
11．暗褐～（にぶい）褐土＋ロ粒・ロ小B25%（層中央に斜めに入る），炭粒，し２，15より明
12．極暗褐～暗褐土＋ロ粒若干，器片微少，し２
13．暗褐（～極暗褐）土＋にぶい褐土，し３～４，ロ粒やや多（5%），11+12の様相，16は13下部澱み層
14．暗褐土＋にぶい橙褐土30%＋ロ粒10%，し２
15．暗褐土＋ロ粒若干＋黒有機質土Ｂ少，炭粒少，し２
16．暗褐（～極暗褐）土＋黒褐B30%＋ロ粒少，し１
17．極暗褐～暗褐土＋ロ粒若干，し４，13より暗
18．暗褐～にぶい褐40%＋極暗褐50%以上＋ロ粒少，し２
19．暗褐～極暗褐土＋ロにぶい黄褐～橙土小B5%，し４
20．暗褐～極暗褐土＋ロ粒微少，器片少，し４，37より明
21．黒褐～極暗褐シルト土＋ロ粒少，し３～４
22．にぶい暗褐土＋にぶい褐土40%＋ロ粒若干，し３～４
23．極暗褐（～黒褐）土＋ロ粒・ロにぶい黄褐～橙土B若干，炭粒少，し４
24．暗褐～極暗褐＋黒褐土30%＋ロ粒少，し２～３
25．暗褐（～極暗褐）シルト土＋にぶい褐土30%＋ロ粒少，し２，23・28より明
26．極暗褐土＋にぶい褐土少＋ロ粒微少，し４
27．暗褐＋ロにぶい黄褐B60%強＋にぶい褐土20%，し２
32．暗褐土＋黒褐土B10%＋極暗褐土30%＋ロ粒少，し２
33．暗褐～褐土＋ロ粒・小B10%，下辺黒褐土，し１
28．極暗褐土＋ロ赤褐～淡黄褐土粒5%，炭粒微少，し４
29．極暗褐（～暗褐）土＋ロにぶい橙～橙小B5%＋黒褐小B10%，炭粒少，器片含やや含む，粘ややあり，し４
30．極暗褐～黒褐土＋ロ粒若干＋にぶい褐B少，し１～２
31．暗褐～にぶい褐土＋ロにぶい黄褐～淡橙土粒・小B40%，し４　／35．暗褐土＋ロ粒少，し２
34．ロ（にぶい）黄褐土主体＋暗褐土B20%，33側暗褐土
36．暗褐（～極暗褐）土＋ロ粒微少，し４
37．極暗褐（～暗褐）土＋ロ粒少，し３～４
38．黒褐～極暗褐土（21とほぼ同）＋ロ橙土粒やや多（5%，21より目立つ），し２～３（21より甘い）
39．黒褐～極暗褐土，28・38より暗（黒っぽい）
40．暗褐（39より明）土＋ロ粒少，器片あり，し４
41．暗褐土＋極暗褐土少＋ロ粒・小Ｂ少，し５，８より明
42．褐～暗褐土＋ロにぶい黄褐土25%＋極暗褐土小Ｂ少＋ロ粒5%，し２
43．暗褐（～褐）土＋褐土20%＋ロ粒若干（42より少），し４，10・17・22より明
44．（極）暗褐土＋ロ橙～黄褐土Ｂ・ロ粒50%，し４，粘
45．暗褐土＋にぶい黄褐・にぶい橙土（ロＢ）40%，し４
46．にぶい黄褐・褐土＋ロ黄褐土Ｂ（西上側多）30%，し４
47．にぶい褐～淡暗褐土＋ロ粒・ロ小Ｂ多（15%），し２
48Ａ．暗褐（～極暗褐）土＋ロ小Ｂ・ロ粒20%，し４
48Ｂ．暗褐土＋ロ橙土Ｂ斑状40%0%，し３～４
49．（極暗褐～）暗褐土，ロ橙土粒・ロ橙土小Ｂ15%，し２
50．極暗褐～暗褐土＋ロ橙土小Ｂやや多10%，し２～３
51．暗褐（～にぶい褐）土＋ロ粒やや多5%，し２
52．にぶい褐～にぶい橙褐土（ロ汚れ土）＋暗褐土40%（上半多）＋ロ橙土粒多10%（下半多），し２
53．にぶい褐～暗褐土＋（暗くにぶい）橙褐土20%＋ロ黄褐土粒・小B20%，し４
54．にぶい黄褐～（にぶい）橙土(ロ)＋褐土少，し４，粘
55．褐～にぶい橙褐土＋ロ橙土小Ｂ・ロ粒30%＋暗褐土10%，57より58に近い層，し１～２
56．にぶい橙褐（～にぶい褐）土（ロ汚れ土）＋ロ粒多10%＋暗褐5%以下，し４
57．にぶい橙～にぶい褐土（ロ汚れ土）＋ロ橙土粒多10%＋暗褐土20%斑状，し３～４（よく詰まる），58より暗
57Ｂ．にぶい橙土主体＋褐土10%，し４，54と56の中間
58．橙～にぶい褐土小Ｂ・粒70%＋褐土25%斑状＋黒褐土小Ｂ少，し１
59．ロ橙～にぶい黄褐土小中B80%＋暗褐～極暗褐土小B10%＋にぶい褐土10%，し１，粘あり
60Ａ．黒褐～極暗褐土＋ロにぶい橙褐土Ｂ小Ｂ・ラミナ混合15%，し２，溝中央側黒褐土溜まる
60Ｂ．極暗褐土＋ロ小B15%，し２
61Ａ．ロ黄褐土＋黒褐～暗褐土25%（ラミナ状），し４，粘，黒褐土東半多　／61Ｂ．黒褐土混じり少，59に近い
62．ロ黄褐～橙土主体＋にぶい褐土20%，59に近い，し１
63．ロ橙（～にぶい橙）土崩落土＋にぶい褐土汚れ20%，し２，粘あり
64．27層からロにぶい黄褐土少10%（暗褐土主体）＋ロ粒少＋にぶい褐土20%，し２
65．にぶい褐（～にぶい橙褐）土＋黒褐土B20%ラミナ状・斑状＋ロ橙土粒20%，し２，57＋黒褐土Ｂ含む層
66．62と59から漸移，ロ黄褐～橙土（ややにぶい色）主体＋褐土10%以下，し１～２

表１．ＳＤ００１北壁，ＳＤ００２南壁（Fig. 5）土層注記一覧

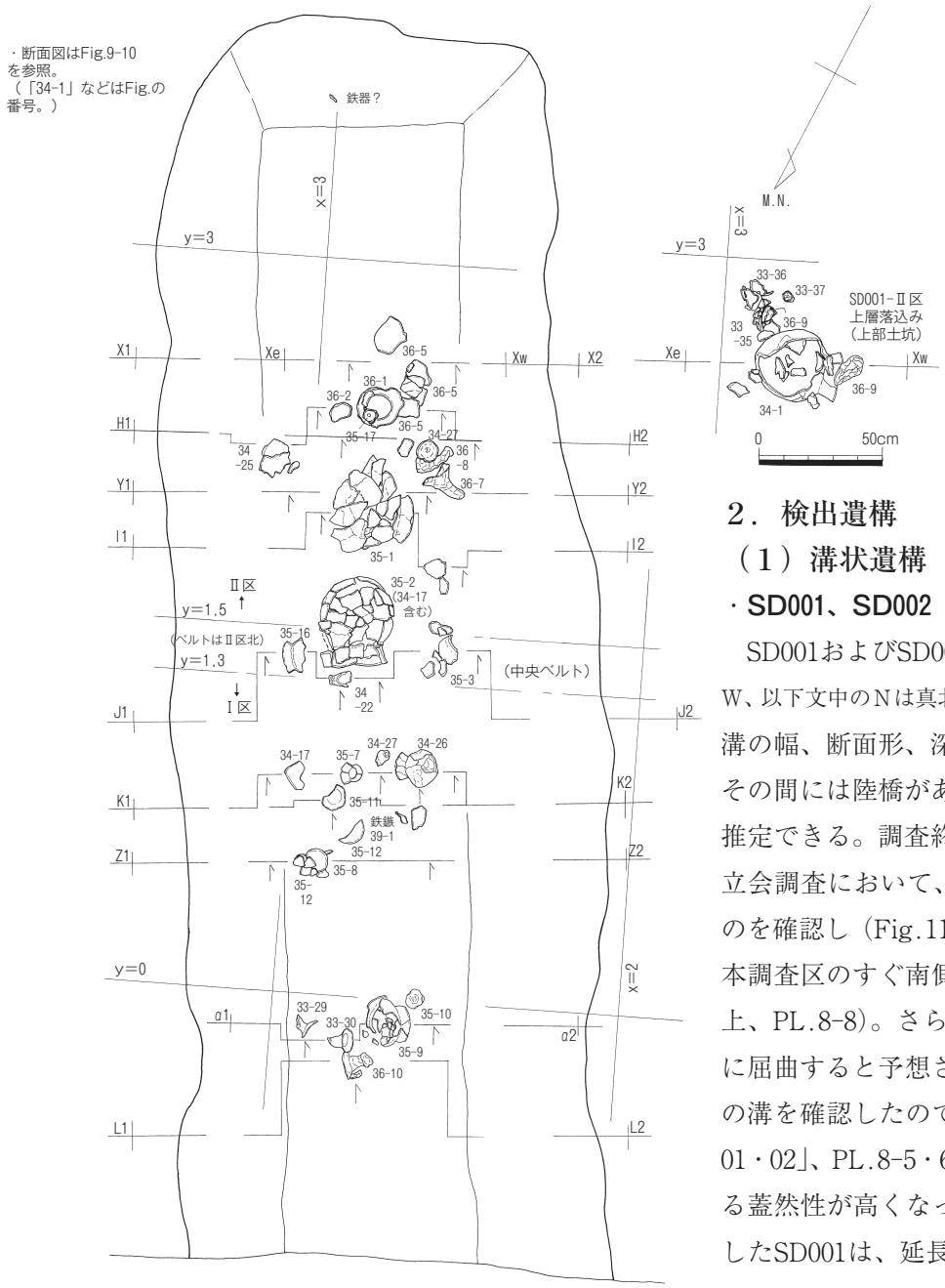


Fig.7　SD001遺物出土状況平面図（1/30）

２．検出遺構

（１）溝状遺構（SD）と付随遺構

・SD001、SD002（推定方形区画溝）（Fig.4）

SD001およびSD002は、同一線上（N-34.5°前後－W、以下文中のＮは真北とする）の溝状遺構であり、両溝の幅、断面形、深さ、出土遺物の時期が酷似し、その間には陸橋があるものの同時期の一連の溝と推定できる。調査終盤の建築付帯工事に伴う工事立会調査において、SD001は北側で西に屈曲するのを確認し（Fig.11左下、PL.8-7）、またSD002は本調査区のすぐ南側で延長を確認した（Fig.11左上、PL.8-8）。さらに南ではSD001北側と対称的に屈曲すると予想され、これを裏付ける東西方向の溝を確認したので（Fig.11右上「南西トレンチ01・02」、PL.8-5・6）、**方形区画溝（方形環溝）**である蓋然性が高くなった（Fig.3）。一方、西へ屈曲したSD001は、延長があるはずの工事立会西側ト

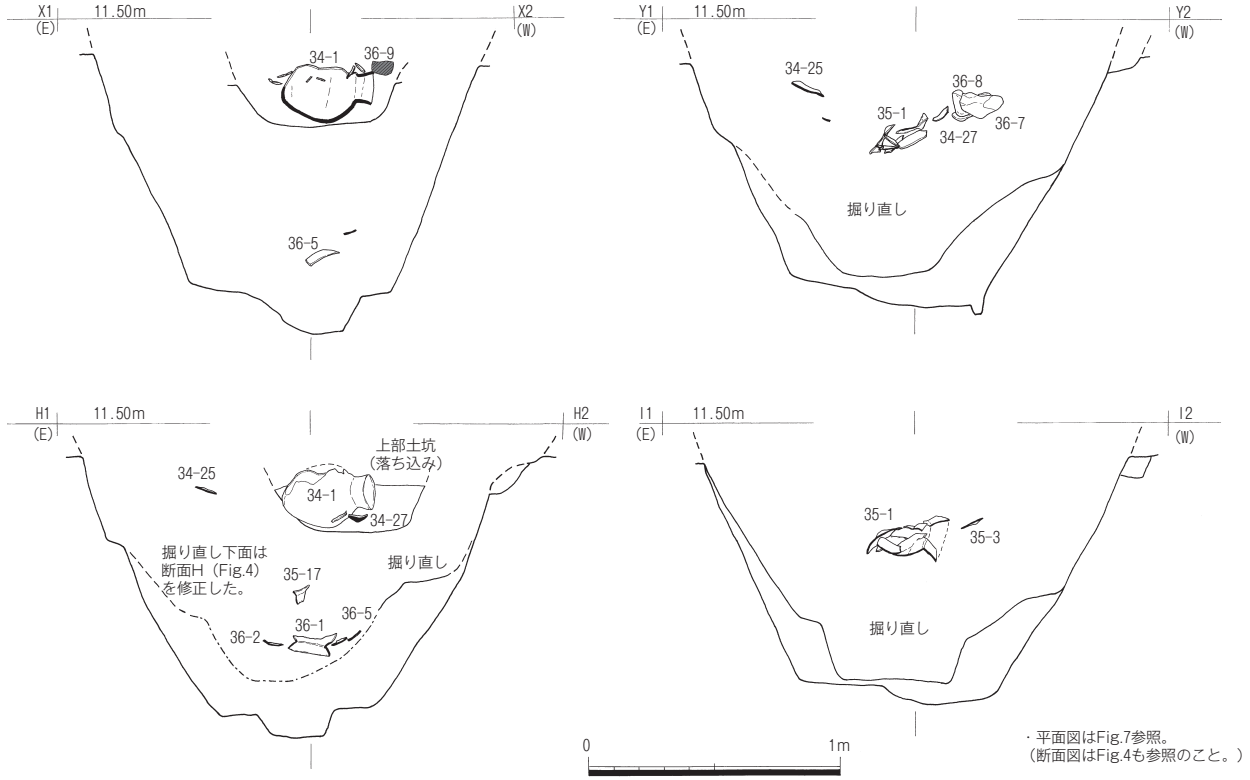


Fig.8　SD001遺物出土状況断面図①（1/30）

レンチ01・02北端で検出されず、その代わりに敷地北西隅のトレンチで黒褐色土の落込みが確認されたので、これがSD001の延長と判断した（Fig.11右下、PL.8-9）。溝の曲がり方から、古墳時代「首長居館」などの方形環溝に付設することがある**「突出部」**の存在が推定できる。この部分は遺構の上面確認のみであり不確実であるが、「突出部」ならば、SD001の内法から突出部の推定外縁上端までが約4.5mとなる（以下全て検出レベルが同じ場合の推定値）。またSD001北辺とSD002の推定南辺の距離は、約17.6m、溝の芯々が約16.3mとなる。「突出部」を方形区画の中軸とすると、東西は溝の芯々で約20.0m、溝の外縁上端で約21.5mとなる。ただし、方形区画の可能性は高いが西半分は未調査であり、「突出部」の推定を含めて今後周囲で調査が行われた場合の検証課題である。なお、SD002・001の北側延長方向は諸岡丘陵頂部を向くことが興味深い事実として指摘できる（Fig.1、裏表紙写真左上）。

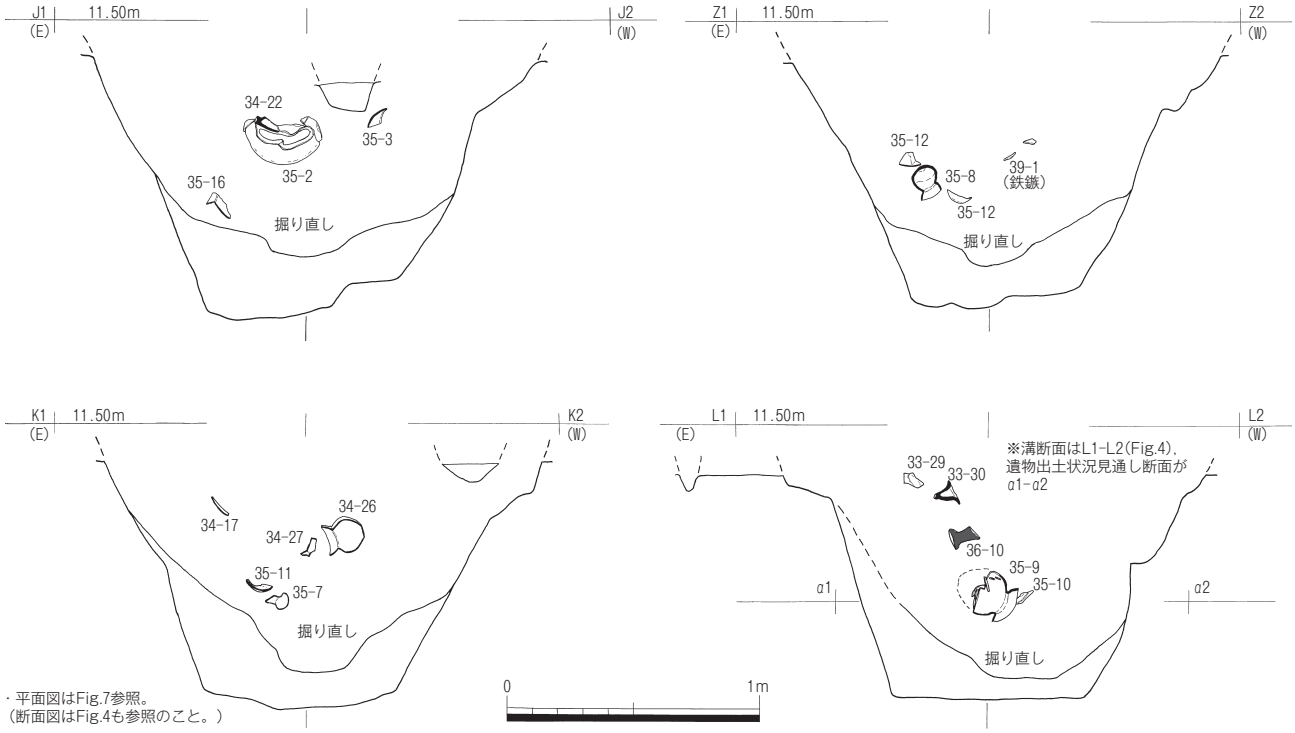


Fig.9　SD001遺物出土状況断面図②（1/30）

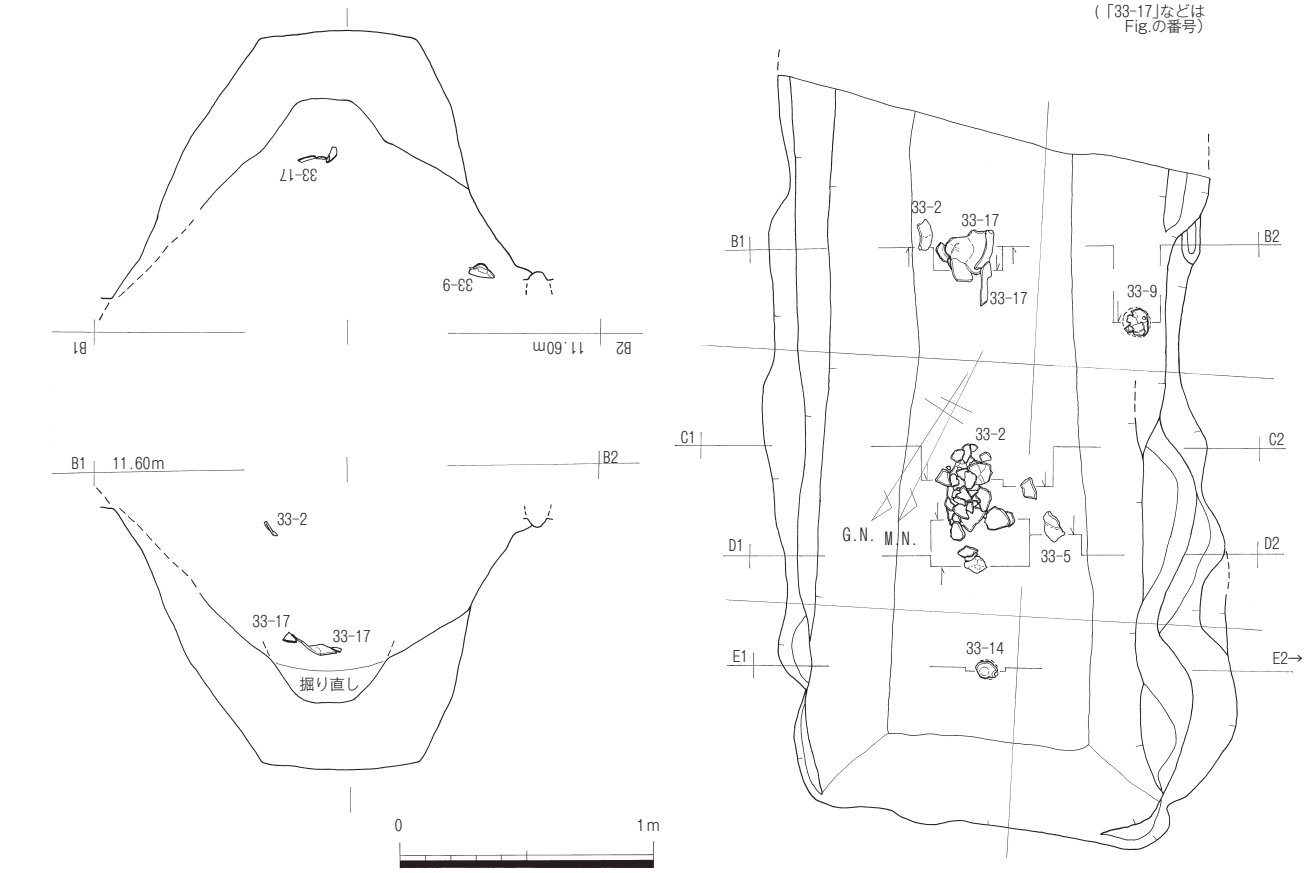
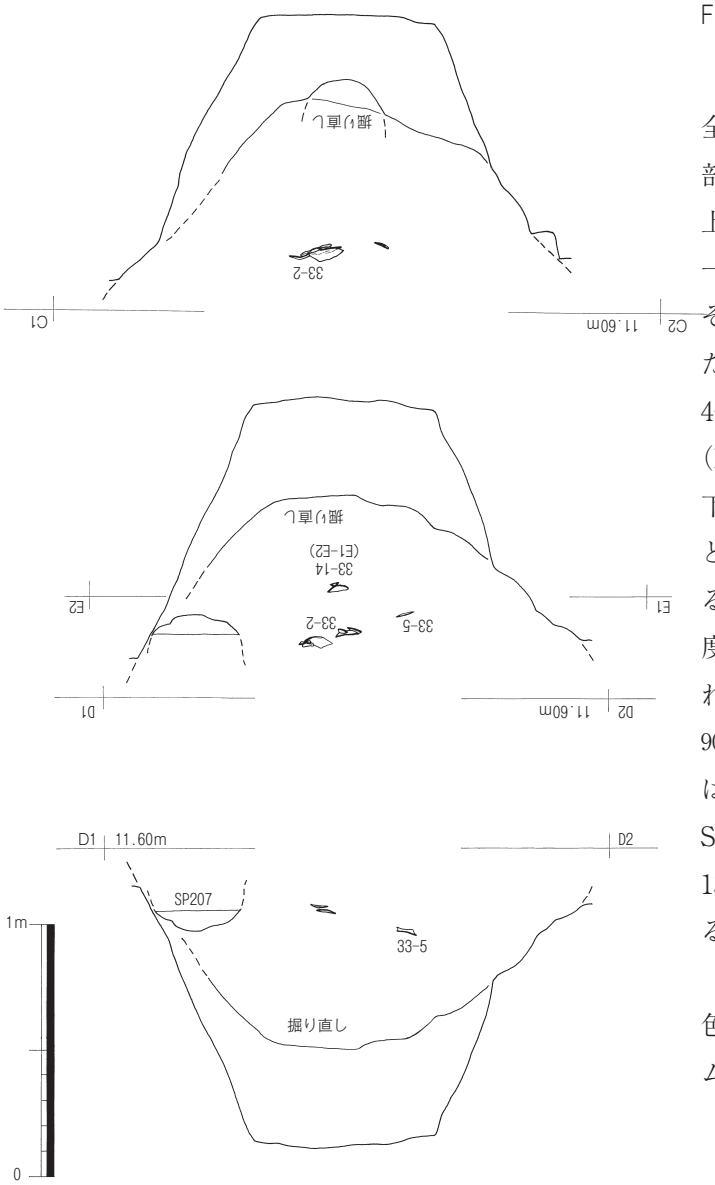


Fig.10　SD002遺物出土状況平面図（上）・断面図（左）(1/30)



SD001も**SD002**も、完掘した本調査範囲では全て断面逆台形であるが（Fig.4）、中位より上部がやや開き気味である。SD001・002ともに、上面幅は155～180cm前後、深さは100～105cmで一定しており、底面レベルも陸橋に近い箇所とそこから離れた箇所の間に有意な差がない。ただしSD002の底面がおよそ平坦である（PL.4-5）のに対しSD001の底面には凹凸がある（PL.3-6・7）。また底面はいずれもトスローム下部に達し、雨が降った後などは湧水があったと思われるが（調査中もそうなった）、常時湧水する深さではない。調査区東側の竪穴住居の遺存度を勘案すると、遺構上面は約70～80cm削平されていると推定される（竪穴住居の深さが本来90～100cmとした場合）。その場合、溝の本来の幅は2.6～2.8ｍ前後となろう。またSD001-SD002間の**陸橋部**は、現状220cm幅だが、本来は130cm前後という狭い出入口だったと推定できる（Fig.4下）。

溝の覆土はSD001・002ともに主として黒褐色～暗褐色土で、中層以下は層により地山ロームブロックの多い層がある（Fig.5、表１、

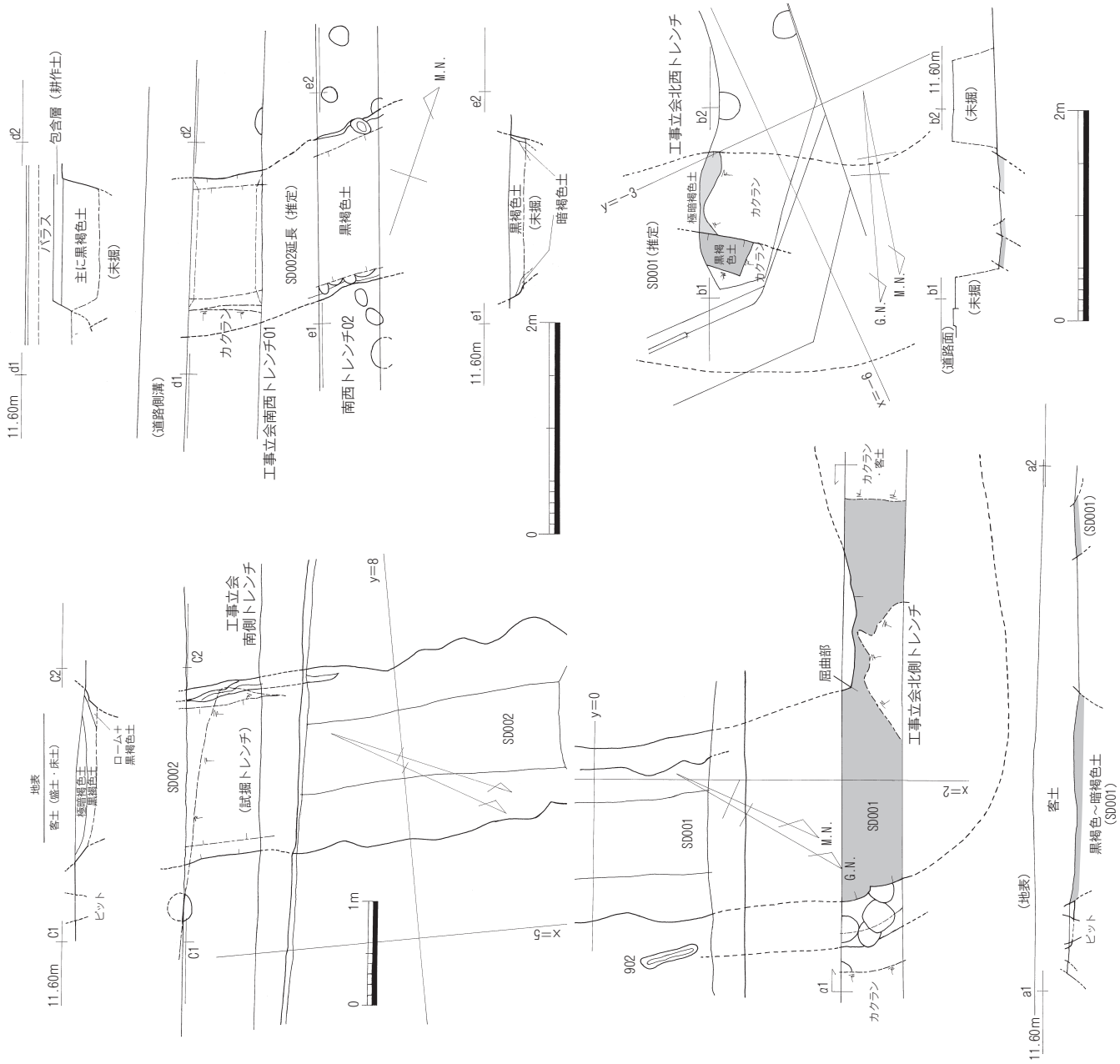


Fig.11　工事立会調査区確認SD002（上）・SD001（下）実測図（1/60）

SD002はPL.4-6・裏表紙左最下段、SD001はPL.4-1・裏表紙左下二段目）。下層では、一時的に滞水があったのか有機物（炭化物など）を含む黒褐色泥質シルトの層がある。地山ブロックを含む層の堆積は区画の内外（西東）どちらにも偏ることがないので、一方に土塁などの盛土があったことは推定できない。調査では、SD002は南側、SD001では北側にそれぞれ幅50cmのトレンチを下部まで先行して掘削し、土層断面から堆積状況や途中の再掘削状況を把握して、残りの部分の掘削・精査を行った。土層を検討すると、左右相互のレンズ状堆積を切る不整合なラインがいくつも認められたので、埋没進行途中で何度も掘り直しされた状況が看取できる（Fig.5）。最も下層の掘り直し層は平面的にも把握し記録した（Fig.6、SD001はPL.3-3、SD002はPL.4-3）。その下部掘り直し層は、SD002では深さ70～80cm、SD001では80～90cmと差がある。またSD001-Ⅱ区上層では土坑状の落込みを確認した（PL.2-1）。土層断面を見ると、SD001では平面で把握できなかった上層での土坑状落込みが他にもあったらしい（Fig.5上-56層）。ただしSD002では確認できなかった。SD001・SD002ともに陸橋部側の立ち上がり隅角が鋭角に遺存し、さらにSD001では壁面下部では掘削時の鋤痕跡を確認した（PL.3-7）。

SD001・002ともに、**古式土師器**がまとまって出土した（遺物出土状況はFig.7～10、PL.1-3・4、2-1～6、PL.3-1～6、PL.4-2、裏表紙右下）。いずれも、層位や廃棄単位での出土状態を詳細に記録したので（Fig.7～10）、土器廃棄という祭祀行為の把握や土器編年の研究に寄与する資料になった。

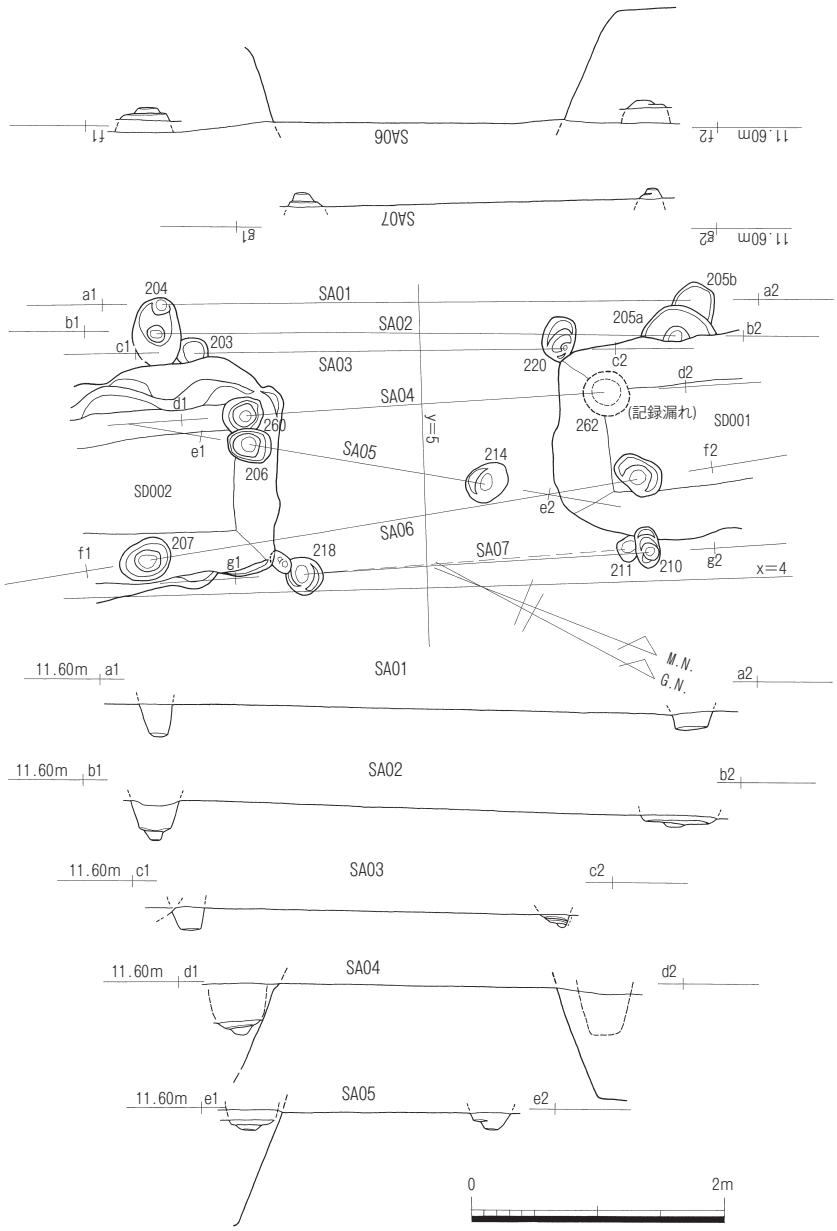


Fig.12　SD002-SD001間門柱状遺構実測図（1/60）

SD001では、①Ⅱ区上層（一度埋没した後の掘り込み＝**上部土坑**、Fig.7右上33-35・36・37、34-1、36-9、遺物番号はFig.33以下に対応、PL.1-3・4、PL.2-1）、②Ⅱ区北～Ⅰ区南中層上部～中位（Fig.7中35-1～3、36-7、34-26・27、鉄鏃39-1、北側36-10支脚、PL.2-4・6）、③Ⅰ区中層下部～下層上部（同35-7・8・11・12・16、北側35-9・10、PL.2-5）、④Ⅱ区下層（同36-1・2・5、PL.3-4手前・3-5左・3-6奥）で各一括廃棄土器群が把握できた。他に、⑤Ⅰ区北側上層（同33-29・30、PL.2-2手前）の単位がある。①の廃棄方向はどちらとも言えないが中央より西側に寄っていることが注意される。②は西側（区画内側）から、③は東側（区画外側）から、④はどちらかといえば西側から、⑤は東側から廃棄された可能性が高い。土器群の様式が下層から上層へ新しくなっている。土器の中には、ヘラ描記号や打欠き穿孔の存在、支脚の出土、外来系搬入品の存在などから、祭祀的行為に伴う土器廃棄の可能性がある。**SD002**では、上層中央で壺33-2が出土したが（PL.4-2）、33-5の廃棄と一連ならば、傾きから外側からの廃棄となる。33-2の口縁部はやや離れた南側で外側から廃棄されている。同じく上層33-9は西側（内側）からの廃棄である。下層上部33-17は、下部掘り直し層溝下層出土だが（PL.4-3後方）、外側からの廃棄だろう。その他SD002では、最下層で底面からやや浮いて炭化した木材の残骸が出土した（PL.4-5）。

溝の掘削時期は、上記SD001⑤の下部掘り直し溝最下層土器群（Fig.8左下）がⅡB期であるから、それ以前であり、出土遺物の中にⅡA期の土器があり、それが掘削時期であろう。また**溝の存続時期**は、上層土器から少なくとも古墳時代中期初頭までは区画溝として機能していたとみられる。

・方形区画に付随する遺構

以上のSD001・SD002からなる推定方形区画溝に付随する遺構として、まず**掘立柱建物（SB）**があるが、これは後述する。以下では、陸橋部に推定した**門柱状遺構**を報告する（Fig.12）。門柱状遺構はいずれも、陸橋部の南北にある２本の柱穴から想定したもので、**SA01～07**の７組を想定した。これらのうち、**SA01～03**は溝に切られることになるが、SD001・002ともに数度の大がかりな再掘削が想定され、問題ないだろう。また柱穴の切り合い関係から**SA03→SA01→SA02→溝再掘削**という順序が想定される。対して**SA04～07**は柱穴が溝を切る、ないし柱穴を覆土途中で検出したものである

(SP260はPL.4-2)。このうち**SA04**のSD001側の**SP262**は調査時のミスのため、写真や図面の記録が漏れている。しかし、SD002側の**SP260に対向する位置**の同様の掘削レベルで検出したことを明記しておく。また**SA05**として想定したものは、溝方位からずれている。SA04のSP260をSA05のSP206が切るので、最終段階の門柱状遺構と想定する。このSA05（N-18°-W）に近い方位の遺構として、区画内のSB06、区画外側（東側）のSC03a～c、SC05がある。

・**SD902**（Fig.11左下）

SD001の北側の東に並行する様に検出した幅10cm程

Fig.13　SC003平面図（1/60）

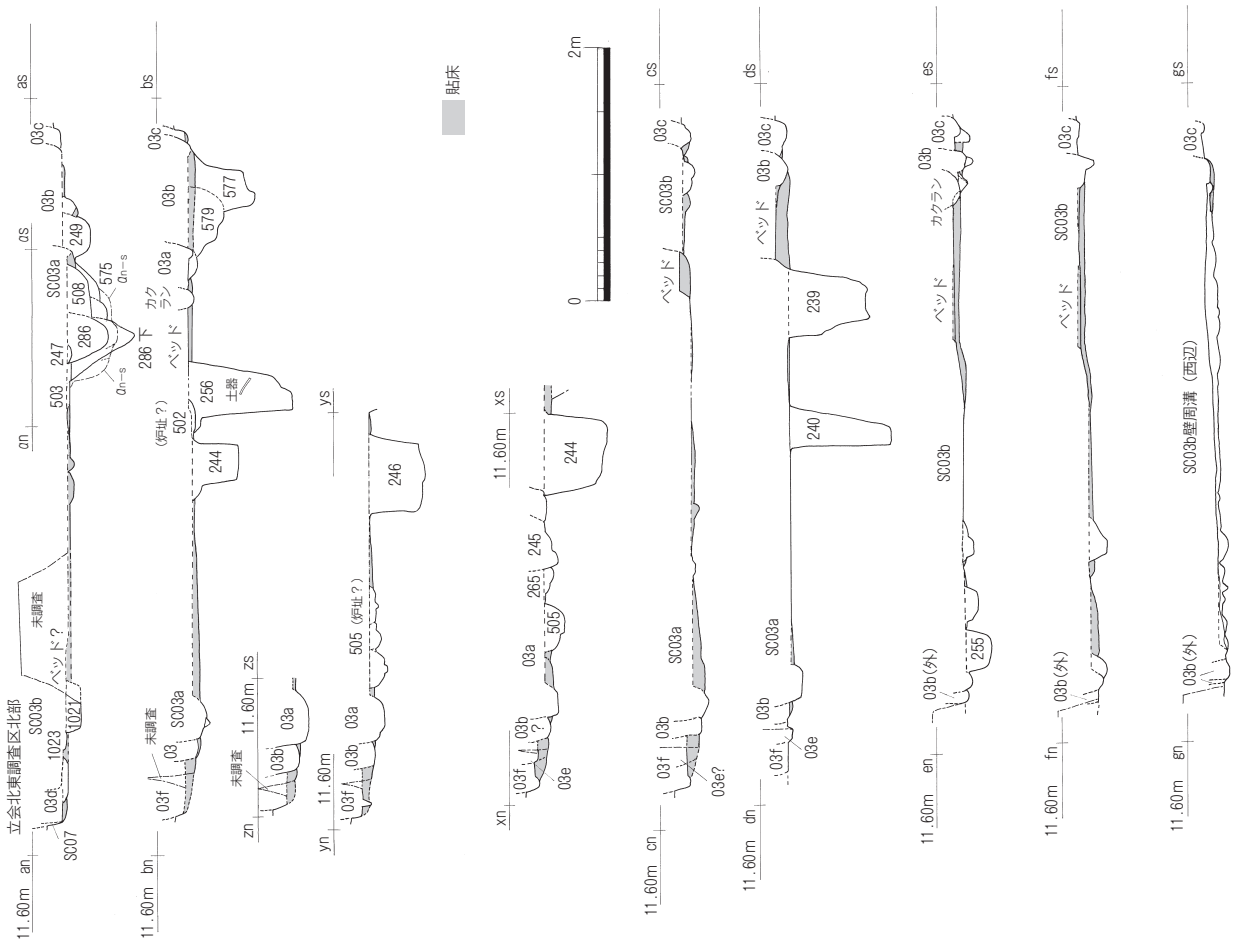


Fig.14　SC003断面図（N-S）（1/60）※Fig.13参照

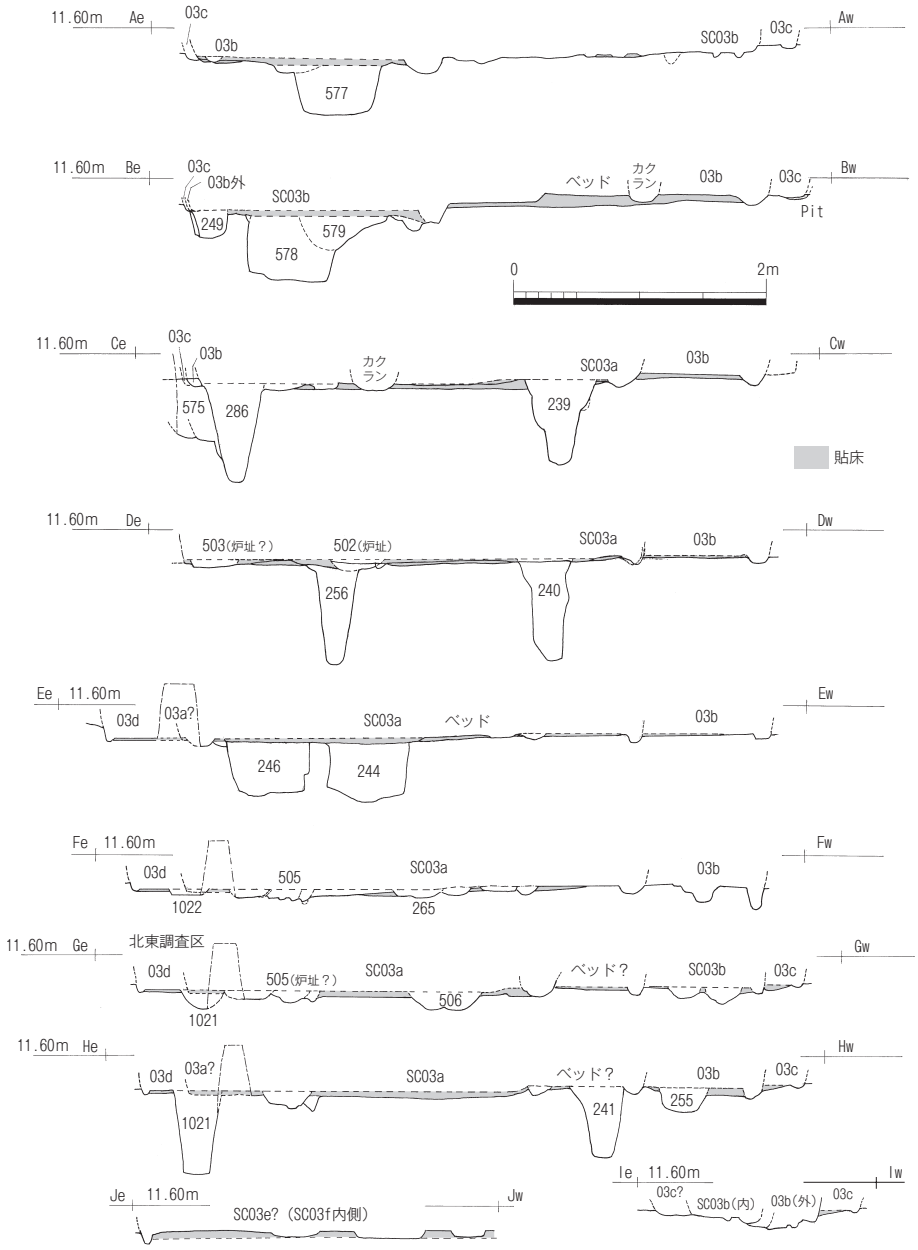


Fig.15　SC003断面図（E-W）（1/60）　※Fig.13参照

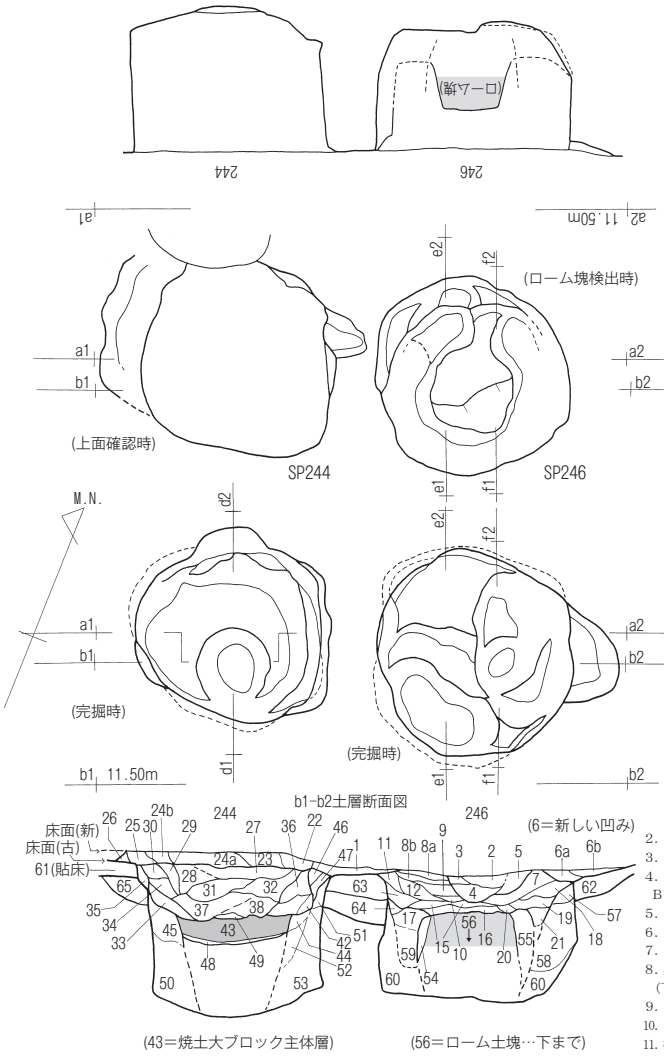
度の小溝。深さは10cmに満たず、南北で自然に浅くなり消える。SD001の北側延長を確認した工事立会北側トレンチでは、この溝の延長線上に対応するようにSD001上部が東側に浅く拡張し、ピットがある（Fig.11左下）。区画溝が機能したある時点での、柵塀施設の下部構造としての**布掘溝**の可能性がある。

（2）竪穴住居（竪穴建物）（SC）と付随遺構

本調査区東側で**SC003・004**（PL.5-1）および**SC005**を検出し、工事立会北東調査区で**SC007**とSC003の北辺・東辺、SC004の南東部と北東部を検出した。いずれも方形プランであり、時期はいずれも**古墳時代前期**とみられる。重複が激しかったが、ほぼ同一箇所でプランが変更されたものは一つの遺構番号を付し、プラン変更（建替）は支番号を付した（SC003a、SC003bなど）。重複関係は、**SC007→SC004→SC003**となる。重複関係は、SC005は分からないが、位置関係的には一時期一棟であろう。SC004とSC003は多くの建替があり、住居群出土土器の時期幅（ⅡA期～ⅢA期）から、一棟の実質的存続期間はきわめて短期間と推定される。西側の方形環溝の「祭祀場」との推定にも関係するだろう。

・**SC003**（Fig.13～15、PL.5-2・3、裏表紙右中段）

正方形に近い竪穴住居のプラン変更（建替）の累積である。SC004を切る。**SC003d**（工事立会北東調査区で検出）**→003c→003b→003a**の順序である。003dと、壁周溝痕跡から「003b古（=**003e**）」としたものは同一の可能性がある。およそ、平面プランが大から小へ変遷している。**003a**は003bをベッドとする同一住居の土間部の可能性も考えたが、北側で壁周溝の切合いがあり、別住居と認定した。**003b**は南西部に**ベッド**を有するが**（貼床で構築）**、その北東隅がより新しい003a内に残ったような検出状況であり、**棚状施設**として003a内に一部残ったとみられる。北東調査区で検出した「003c」北辺は、本調査区側のSC003cと同一の可能性もあるが、北辺と南辺が平行せず、西辺が揃わないため別住居の可能性がある（**003f**とする）。その場合、**003d（=003e?）→003f→003c**となる。なお**深さ**は遺存が良好な箇所でも20cm前後しかない。多くは10cm前後ないしそれ以下である。



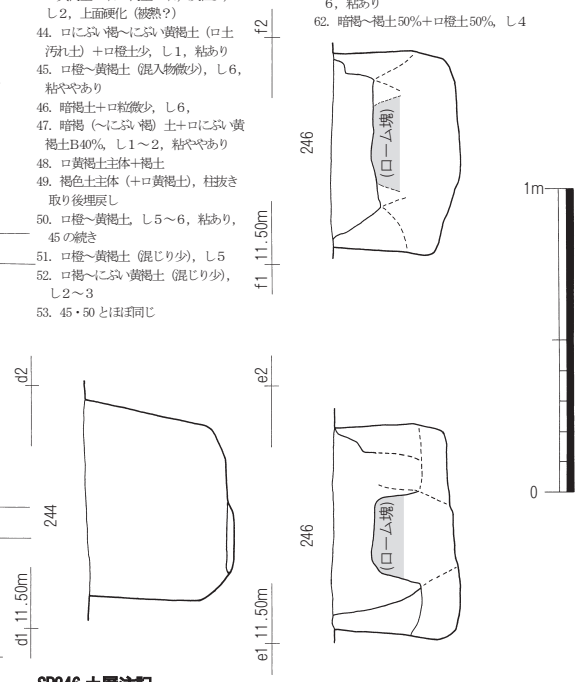


Fig.16　SP246・244実測図・土層断面図（1/25）

SP244 (Fig.16左) 土層注記

(略称は「表1」参照，「ロ」はローム)

1．(黒褐～) 極暗褐土，し4，器片少，焼粒微少
(1＝貼床？・SP244埋没後，22～26＝二次貼床？)
22. 極暗褐～暗褐土，下部に褐灰～灰褐土シルトB含む，し4
23. 極暗褐土＋ロ橙土若干，焼粒微少，し3～4
24a．極暗褐 (～黒褐) 土 (24bも同) ＋ロ橙土若干，焼粒微少，し3～4　／24b．し4～5，ロ橙褐土若干
25. 極暗褐 (～黒褐) 土＋ロ橙土粒少，し4～5
26. 暗褐～極暗褐土＋にぶい褐土小B少＋ロ黄褐～にぶい黄土粒少，し6
(27～53＝SP246覆土)
27. 極暗褐土＋ロ橙 (～黄褐) 土粒少，し2
28. 極暗褐土 (27より黒い) ＋ロ黄褐～橙土小B少・ロ土粒少，し2～3，粘ややあり
29. 極暗褐 (～黒褐) 土，し4
30. 極暗褐土＋ロ黄褐土粒若干，し2～3
31. (黒褐～) 極暗褐土＋ロ黄褐～にぶい黄土粒若干＋ロ黄褐土小B少，し2～3，粘ややあり
32. 極暗褐土＋ロ橙土粒少，し4，粘ややあり
33. 極暗褐土＋ロ土小b・粒15%±，し2，粘ややあり，焼粒少
34. 暗褐土＋ロ黄褐～橙土B・粒20%，し2，粘ややあり
35. 暗褐土 (34よりやや橙色気味) ＋ロ土粒少＋ロ土小B微少，し4，粘ややあり
36. 極暗褐～暗褐土＋ロ土粒少，焼粒少，し2，粘ややあり
37. 極暗褐～暗褐土 (38の暗褐土～漸移) ＋ロ橙土小B・粒若干，し4
38. 暗褐土 (37より明) ＋ロ土粒少，し4
39. (極暗褐～) 暗褐土＋ロにぶい黄褐土粒若干，焼粒8mm以下若干 (層下半に混入粒多い)，し2
40. 暗褐土＋焼B25mm以下若干＋ロ土粒少，炭粒少，し1，粘ややあり

表2．SP244土層注記 (Fig.16)

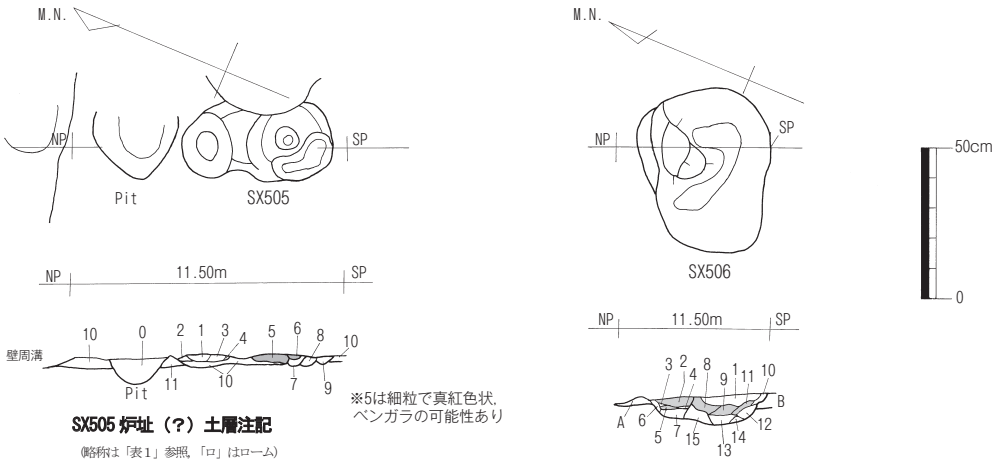
SP244土層注記 (図の左下の続き)

41. 暗褐土 (38より明) ＋焼B20mm以下・焼粒少＋ロ粒少，し1
42. ロにぶい黄褐土＋暗褐～にぶい褐土50%斑状，し1，粘ややあり
43. 赤褐焼土B30mm以下多 (30%) ＋ロ黄褐土30%＋褐土30%，炭粒少，し2，上面硬化 (被熱？)
44. ロにぶい褐～にぶい黄褐土 (ロ土汚れ土) ＋ロ橙土少，し1，粘あり
45. ロ橙～黄褐土 (混入物微少)，し6，粘ややあり
46. 暗褐土＋ロ粒微少，し6，
47. 暗褐 (～にぶい褐) 土＋ロにぶい黄褐土B40%，し1～2，粘ややあり
48. ロ黄褐土主体＋褐土
49. 褐色土主体 (＋ロ黄褐土)，柱抜き取り後埋戻し
50. ロ橙～黄褐土，し5～6，粘あり，45の続き
51. ロ橙～黄褐土 (混じり少)，し5
52. ロ褐～にぶい黄褐土 (混じり少)，し2～3
53. 45・50とほぼ同じ

SP246土層注記

2．極暗褐土＋ロ橙褐土粒若干，し5
3．(黒～) 極暗褐土＋ロ橙土粒10mm以下20%，し5
4．極暗褐土＋にぶい橙褐～暗黄褐土B30%＋ロ小B・粒10mm以下少，し5～6，粘ややあり
5．極暗褐～暗褐土 (2より明)，し3～4
6．(黒～) 極暗褐土＋暗褐土微少＋ロ土粒若干，し1
7．極暗褐土＋暗褐土20%＋ロ土粒若干，し4
8．黒褐 (上a) ～極暗褐 (下b) ＋にぶい淡褐土B少 (下) ＋ロ土粒少，焼粒微少 (上)，し4 (下) ～3 (上)
9．極暗褐土＋淡褐～橙褐土粒若干，し3～4
10. 暗褐～極暗褐土＋ロ土粒少，し1，粘ややあり
11. 極暗～暗褐土＋ロ土粒10mm以下若干，し2～3
(61～65＝貼床，61・65は244西，63・64は244－246間，62は246東)
61. 暗褐土＋ロ (にぶい) 黄橙土40%以上，し6
65. ロ黄橙～黄褐土＋暗褐～褐土10%以下，し6
63. 極暗褐 (～黒褐) 土B40%＋ロややにぶい橙～黄橙褐土50%以上，し5，粘あり
64. ロ (にぶい) 橙～橙褐土＋暗褐土斑状10%，し6，粘あり
62. 暗褐～褐土50%＋ロ橙土50%，し4
13. 暗褐土＋ロにぶい橙～黄橙土粒・B20%，し2～3，粘ややあり
12. 極暗褐土＋ロ土粒少，し2～3
14. 13の暗褐土＋ロ黄橙50%，し1，粘あり
15. ロ (明) 橙～にぶい黄橙土B・粒50%＋暗褐～極暗褐土40%強，し3～4，粘あり
16. 暗褐～にぶい褐土＋ロにぶい黄橙～橙土B15%，し4，粘ややあり
17. ロ橙～にぶい黄橙土＋暗褐～にぶい褐土30%，し1，粘あり
18. 暗褐土＋ロにぶい橙 (橙褐) 土B50%，し2，粘あり

(→19～21，54～60別記)



※5は細粒で真紅色状，ベンガラの可能性あり

SX505炉址（？）土層注記

(略称は「表1」参照，「ロ」はローム)

1．暗褐～にぶい褐土＋ロ黄褐～黄橙B30%，炭粒少，焼粒微少，し2，
2．ロにぶい橙土＋褐土汚れ少，し5，粘ややあり
3．暗褐 (～褐) 土＋ロ粒15%，炭粒少，焼粒微少
4．ロにぶい黄褐～にぶい橙土80%＋褐～暗褐土，し4，粘ややあり
5．赤褐～明赤褐土 (粒子細かい「焼土」状だが赤色顔料の可能性あり)，し1
6．褐～暗褐土＋赤褐焼土粒・B若干，炭粒少，し2　／6・7間　被熱，焼土赤褐土 (シルト質)
7．浅橙～ややにぶい橙ふお＋にぶい褐土30%，し3～4，やや被熱 (焼土化)
8．黒褐～極暗褐土B主体 (有機質黒土含む) ＋ロ小B・粒15%，し5
9．にぶい褐土＋ロ黄褐～にぶい橙土30%，し5，炭粒・焼粒少
10. ロにぶい黄褐～黄橙褐土＋褐土汚れ10%，貼床
11. ローム地山，橙～ (にぶい) 黄橙・黄褐粘質土

SX506炉址土層注記

(本注記の焼土粒・炭粒，「多」＞「やや多」＞「含む」＞「若干」＞「少」＞「微少」＝30%以上＞15%以上＞10%±＞5%±＞2%以上＞2%未満)

1．褐～暗褐土＋ロB40%，焼粒・炭粒微少，し5
2．暗褐土＋ロ黄褐土粒少，焼粒若干＞炭粒若干
3．ロ浅橙土 (やや被熱・焼土化)
4．ロ浅橙～黄橙土 (被熱少) ＋褐土20%
5．褐～暗褐土＋ロ粒若干，焼粒若干～少，炭粒微少，し4
6．にぶい褐～にぶい黄褐土 (ロ土汚れ)，炭粒微少，し6
7．褐～にぶい褐土＋ロ黄褐土B20%，炭粒・焼粒少，し4
8．暗褐～褐土＋ロ黄褐土小B15%＋焼土化ロ少，焼粒若干，炭粒少，し2～3
9．暗褐土＋ロ粒5～10%，炭粒少，焼粒若干，し3～4
10. 暗褐土＋ロにぶい橙土斑状30%，し5
11. 暗褐～褐土＋ロ黄褐～にぶい橙土粒5～10%，焼粒含む (～若干，9より多)，炭粒少，し2～3
12. 暗褐土＋ロ粒15%±，炭粒・焼粒少，し2～3
13. 褐 (～暗褐) 土＋にぶい橙～黄橙褐土40%，焼粒少，炭粒微少，し4，粘ややあり
14. ロにぶい褐～黄橙褐土B＋褐土20%，し2～3，粘ややあり
15. ロ橙～黄橙褐土B＋にぶい褐土汚れ5%，し4，地山ではない (地山よりしまり甘く・粘性小)
A・B．(明) 橙土＋褐土汚れ，し6，粘あり，貼床

Fig.17　SC003床面SX505・506炉址平面図・土層断面図（1/25）

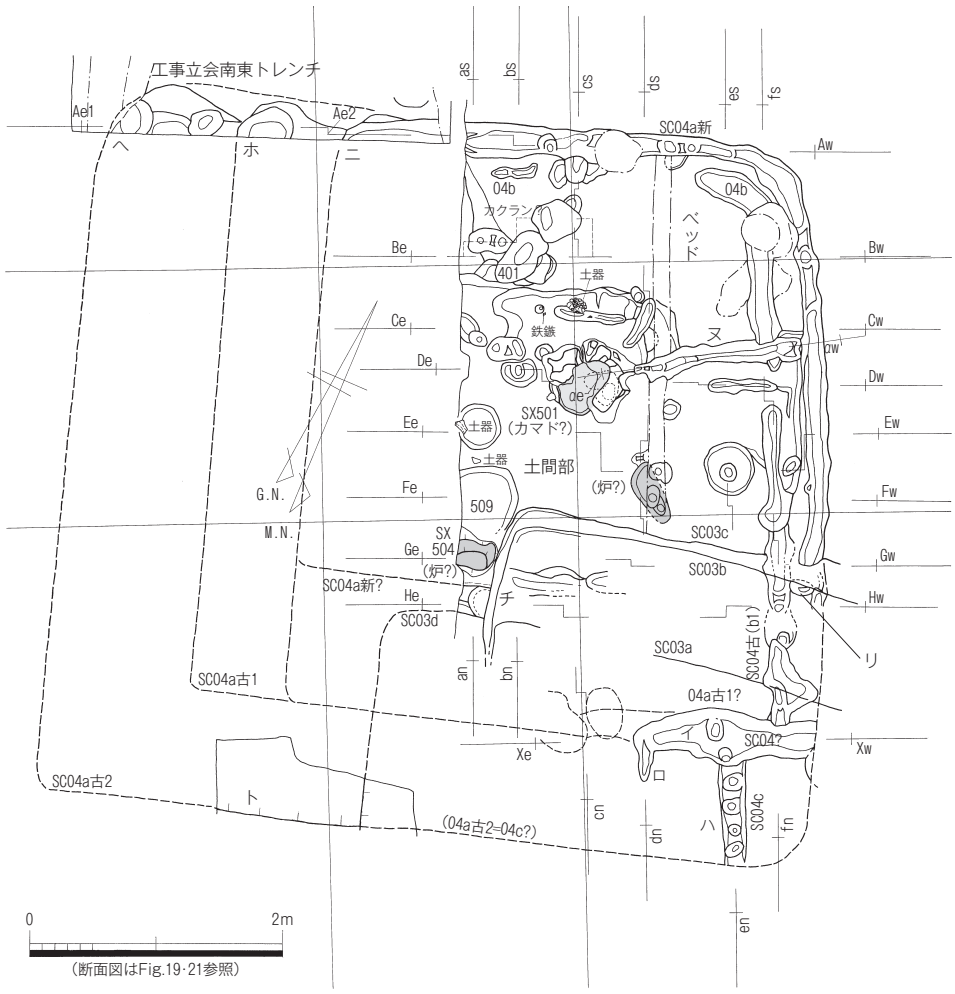


Fig.18　SC004平面図（1/60）

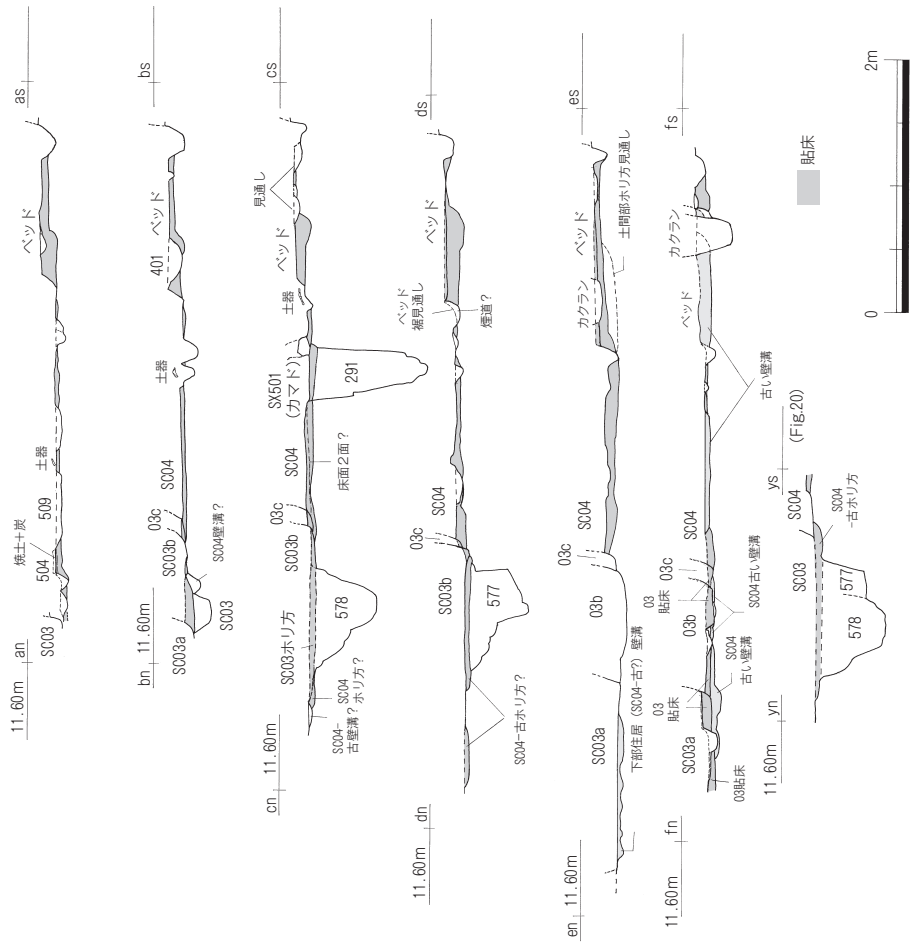


Fig.19　SC004断面図（N-S）（1/60）※Fig18・20参照

SP246（Fig.16右）土層注記補遺

19. にぶい褐土＋ロ橙褐土B60%，し1，粘あり
20. 褐～にぶい黄褐土＋ロ土粒少，し2，粘あり
21. ロ橙～黄橙土＋にぶい褐土微少，し1，粘あり
56. ロ橙～黄橙土主体＋極暗褐土少，し6，粘あり，一見地山だがわずかに崩れる地山ブロック集積，柱抜き取り痕の埋土？（周囲掘り方よりしまる）
57. 62とほぼ同じ（しまり62より甘い），し2～3
58. ロ（明）黄橙～黄褐土＋汚れ少，し5，粘あり，一見ローム地山だが汚れありわずかに崩れる土
54. 56のローム主体土＋極暗褐～褐土10%，し5
55. 55と同じ
59. ロ橙～にぶい黄橙土主体＋暗褐土10%，粘あり，し2～4，17から漸移するが17よりしまる
60. ローム地山土B主体（＋褐土汚れ若干），し3～5，粘あり

表3．SP246土層注記（Fig.16）

SC003aは、南北3.3～4.0m（東辺が広い）×東西3.3m、N（真北）-17.5°-Wである。**SC003b**は、南辺で壁と壁溝にずれがあり、北辺で壁溝が重複するので（新相は東半が003aと重なるか）、新古２段階がある。**003b古**は南北4.75×4.7m、**003b新**は4.8×4.7mで、方位はN-17°-Wである。**SC003c**は、北東調査区北側検出の壁周溝痕跡ライン（PL.8-2・4）が北辺の可能性もあるが、西辺（北西隅）に矛盾が生じ（Fig.13「ロ」）、ならば003b北西隅外側にある壁周溝痕跡が北辺を示すとみられる。その場合、南北4.5～5.25m（東辺が広い）×東西4.95m、方位はN-19°-Wである。**SC003e**は003cと同じ可能性もあるが、別の一時期とした場合、003c北辺東側の「イ」の段差が南東隅となり、北東隅「ロ」と結ぶ線が東辺となろう。南北4.8～5.5m（東辺が西辺より長い）×東西4.15m、方位はN-18.5°-Wとなる。**SC003d**（PL.7-10、PL.8-1～3）は、北東調査区東側で

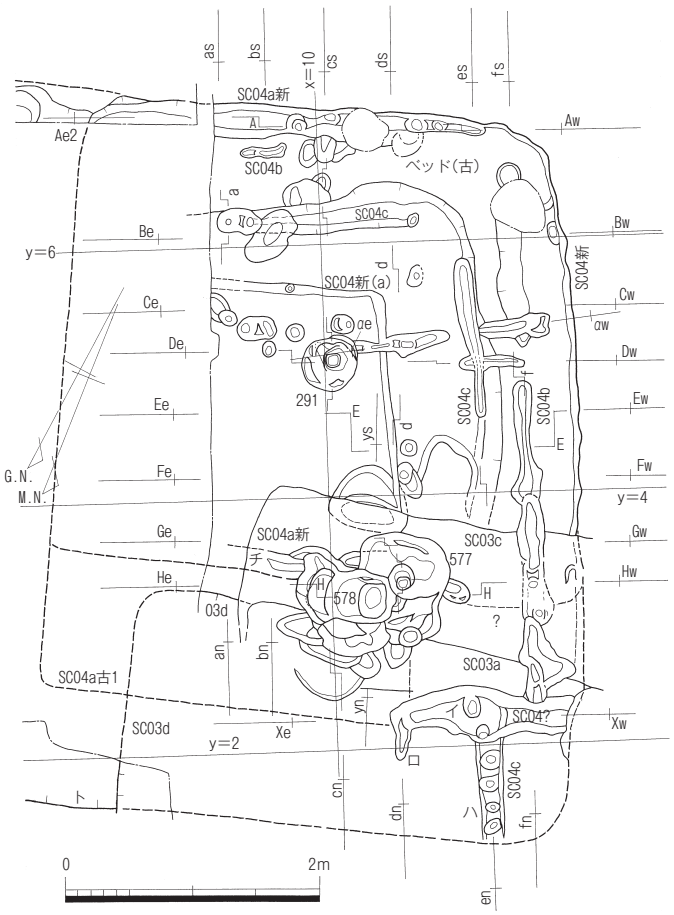


Fig.20　SC004掘方平面図（1/60）

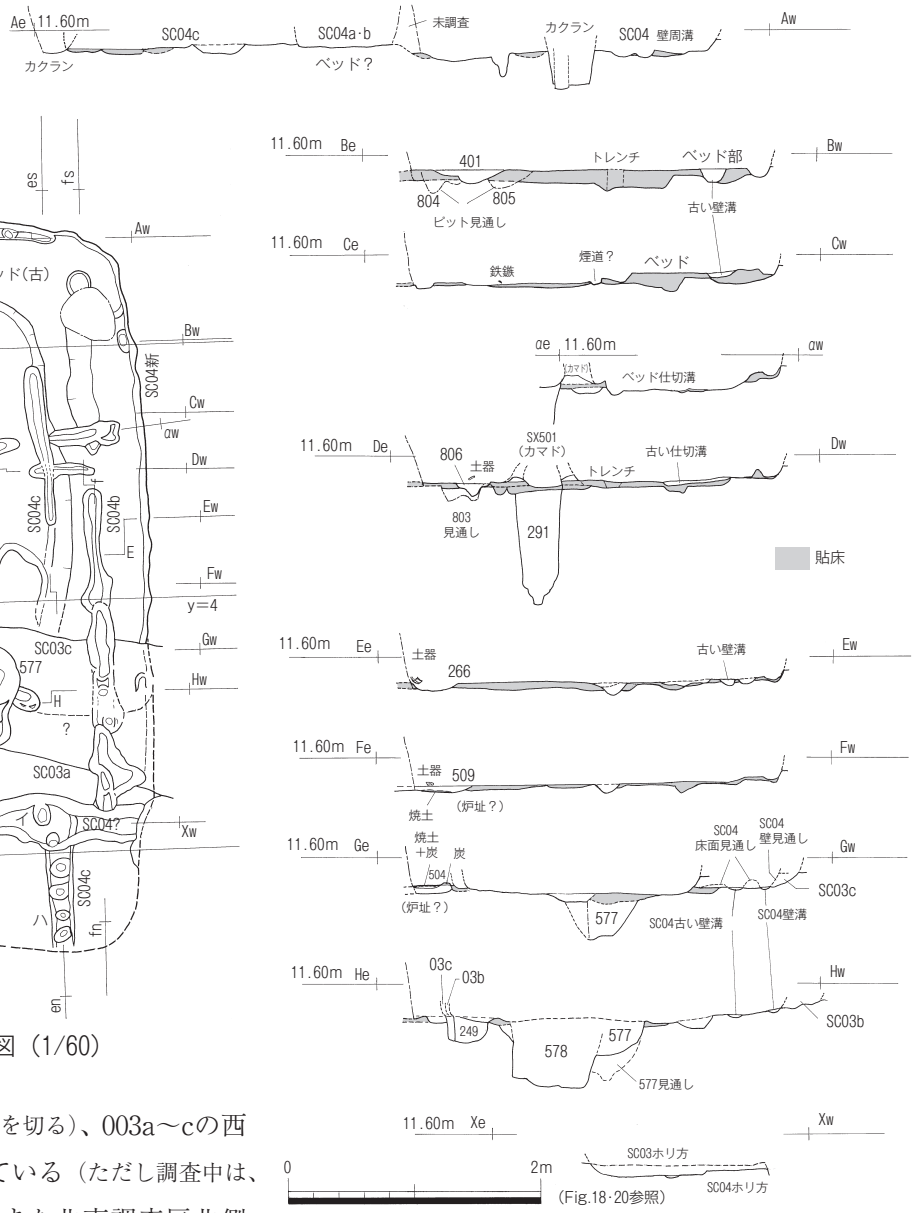


Fig.21　SC004断面図（E-W）（1/60）

大半を検出したが（SC007ベッドを切る）、003a～cの西辺外側で南辺の一部を検出している（ただし調査中は、逆方向のSC004北辺と誤認した）。また北東調査区北側で「**SC003b古**（または**SC003e**）」とした壁周溝痕跡ラインは、**003dの延長の可能性**もある。その場合、西辺（南北）4.6mで、東西はおそらくSC003a西辺前後が西辺になり、東西4.0m前後だろう。方位はN-25.5°-Wである。

土層観察や平面の精査から全体的に**貼床**（地山ローム土）があったが総じて薄く、SC003北半の一部は検出時のミスで貼床面が分からずに掘削していたこともあり（検出面直下で床面）、検出時に主柱穴と考えた箇所や当初縦横に設定したベルトと貼床が認識しやすかった南半の一部以外では、掘方まで下げて調査した箇所が多い。なお一部（SC003aの南東1/4あたり）の貼床は、粗砂礫混じりであった。**掘方**（PL.6-3・4）だが、その底面での全体図はあまり差異がないので提示しなかった（断面図Fig.14・15参照）。また南半の掘方底面は、下部の**SC004掘方底面との区別が不明確**である。さらにSC003の南東隅周囲はSK507があったため、その記録後、調査時間の制約から下部の土坑まで一気に掘削し、SC003の床面や掘方を精査していない部分がある。

住居内にはしっかりした**柱穴**が複数あるが（**SP286、256、239、246、244、240、241、1021**）、二本柱や四本柱で組み合う柱穴が明確ではない。このうち、新しい**SP239・241**（廃棄時に柱を抜いたためにSC003aの壁や壁溝を切る）は**SC003a**に伴う。東側に対向する柱穴があれば四本主柱になるが、ならない。また**SP1021**は**SC007**に、**SP286**（PL.6-2）は**SC004**に伴う可能性がある。残りの256・246・244・240

は主柱穴となるか不明確である。しかし柱穴の深さが近い**SP256**（PL.5-6）と**SP240**が組み合うならば、**SC003b**の**二本主柱**となるだろう。残りの**SP244と SP246は特異な廃棄状況**（後述）であり、主柱ではないだろう。SP003cの主柱は、平面プラン上SC003bと同じSP256-SP240でもよい。SC003d（=003e？）・003fの主柱穴は不明であり、主柱構造に依らない竪穴建物の可能性がある。なお**SC003南東部の土坑群（577,578,581など）**は、実際は**SC003以前の下部遺構**であり、主柱にはならない。柱穴のうち、**SP244**（Fig.16、PL.5-4）は、中層中央の柱抜き痕上部で**焼土ブロック**が多数出土し、柱を抜取り後に

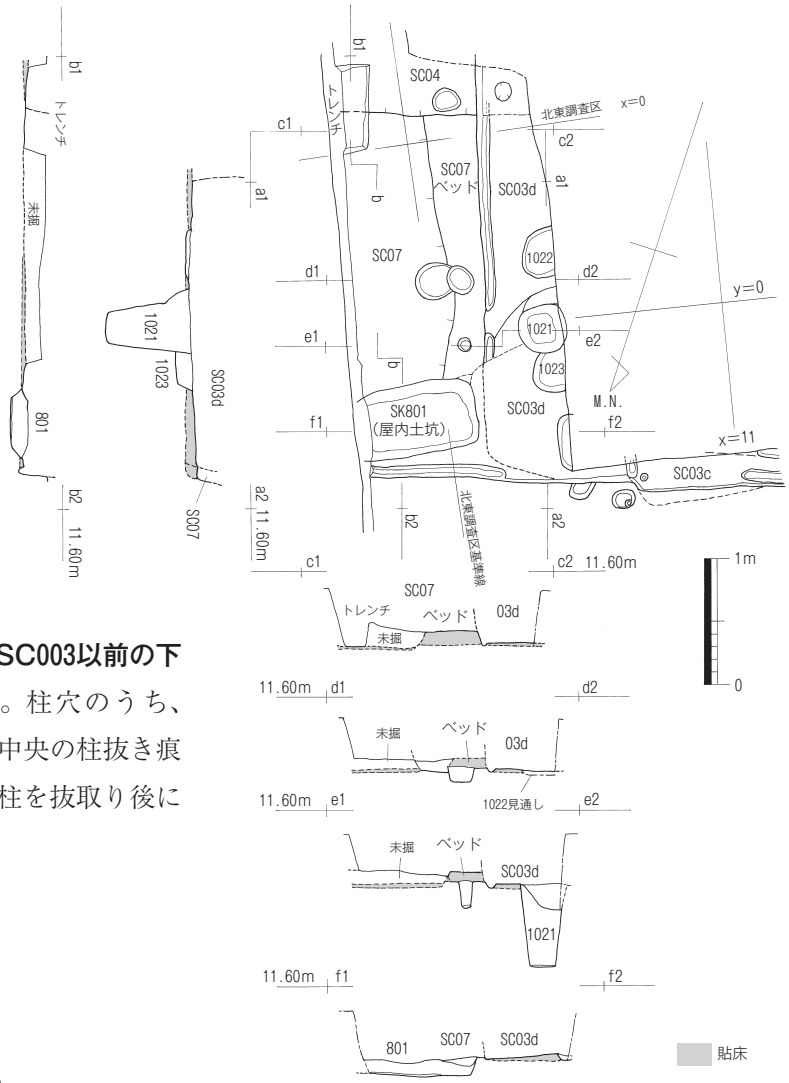
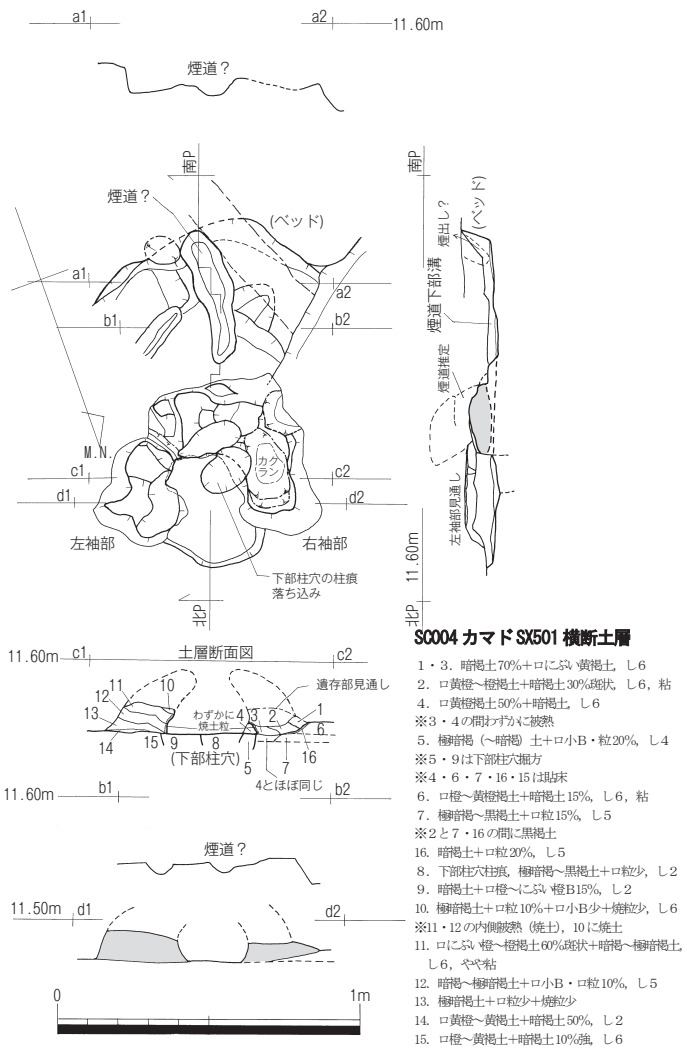


Fig.23　SC007実測図（1/60）



SC004 カマドSX501 横断土層

1・3．暗褐土70%＋ロにぶい黄褐土，し6
2．ロ黄橙～橙褐土＋暗褐土30%斑状，し6，粘
4．ロ黄橙褐土50%＋暗褐土，し6
※3・4の間わずかに被熱
5．極暗褐（～暗褐）土＋ロ小B・粒20%，し4
※5・9は下部柱穴掘方
※4・6・7・16・15は貼床
6．ロ橙～黄橙褐土＋暗褐土15%，し6，粘
7．極暗褐～黒褐土＋ロ粒15%，し5
※2と7・16の間に黒褐土
16．暗褐土＋ロ粒20%，し5
8．下部柱穴柱痕，極暗褐～黒褐土＋ロ粒少，し2
9．暗褐土＋ロ橙～にぶい橙B15%，し2
10．極暗褐土＋ロ粒10%＋ロ小B少＋焼粒少，し6
※11・12の内側被熱（焼土），10に焼土
11．ロにぶい橙～橙褐土60%斑状＋暗褐～極暗褐土，し6，やや粘
12．暗褐～極暗褐土＋ロ小B・ロ粒10%，し5
13．極暗褐土＋ロ粒少＋焼粒少
14．ロ黄橙～黄褐土＋暗褐土50%，し2
15．ロ橙～黄褐土＋暗褐土10%強，し6

Fig.22　SC004カマド（？）SX501実測図（1/25）

火を使うような祭祀が行われたとみられる。また土層ベルトの観察から、古い床面を切り、覆土は新しい床面に覆われている。**SP246**（Fig.16、PL.5-5）は、中層で中央にしまりある堅いローム土が円形に検出され、これを地山と誤認し、周囲のしまりが甘い埋土を先に掘削した。判断に迷ったが（図面ではローム地山塊を山状に書いている）、おそらく柱の抜き痕に、締め固めた地山土を意図的に埋めたのだろう。SP246も古い床面を切り、新しい床面が覆う。さらにSP244を覆う貼床にさらに覆われており、**SP246→SP244**の新旧となる。しかしいずれもどの時期の住居に伴うのかは不明確である。

SC003床面には、「**炉址**」の可能性がある**焼土粒**混じり（**炭粒**も混じるものあり）の浅い凹みが複

数箇所あった（Fig.13の網掛け部分）。**SX503・510・502・509・505・506・550**である。すでに述べたように、貼床を剥がして調査した部分が多いので、建替の各時期（6時期？）に対応する可能性もある。**SX502**は、掲載図（Fig.13）ではSP256に切られたようになっているが、実際は256が埋まった後の遺構であり、**最終段階（SC003a）の炉址**であろう。**SX506**（Fig.11右、PL.5-8）は、他よりやや深めの掘り込みがあり、炭粒もやや多かった。土層を見ると２時期ある可能性があるが、SC003のどの時期に伴うかは不明である。これは他の推定炉址も同様である。また各炉址の位置は、必ずしも住居中央にはない。

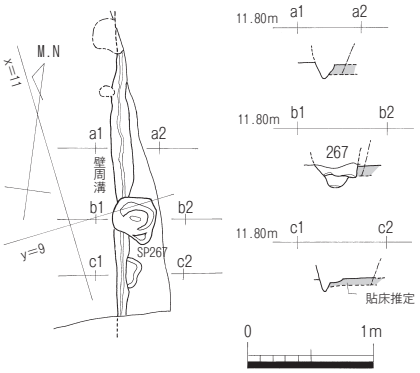


Fig.24　SC005実測図（1/60）

SX505（Fig.17左、PL.5-7）は、「炉址」としたが、他の推定炉址の焼土粒（明赤褐色土）よりもより**真紅色**かつ**きめ細かい粒子の暗赤色土**が集中しており、肉眼観察から**赤色顔料（ベンガラ）**を集積した凹みの可能性を考えた。検出状況から最新のSC003aに伴うものか。赤色土はサンプルを採取し、報告書作成過程で蛍光Ｘ線分析をしたところ（福岡市埋蔵文化財センターの田上勇一郎による）、鉄分（Fe）のピークが突出しておりベンガラとしてよいと思われたが、同じSC003内で他の焼土粒を含む土壌サンプルの蛍光Ｘ線分析でも同様の元素スペクトルがみられたため、結論は保留している（覆土土壌の全てが鉄分が多い可能性もある）。SC003床面の土壌サンプルは他にも複数あり、さらに分析して対照すること、顕微鏡下で他の確実なベンガラ資料と粒子を比較することなどが必要だが、今後の課題としたい。

SC003の**時期**は出土土器（Fig.37-2～13）から、**古墳時代前期前葉新相～後葉古相頃（ⅡＣ期～ⅢＡ期古相）**であろう。SC003bに伴う可能性があるSP256の土器はⅡＣ期である。

・**SC004**（Fig.18～21、PL.6-5・6）

本調査区東側、SC003の南側の竪穴住居である。この住居跡も複数の住居プランの蓄積であり、建替痕跡があるが、南辺と西辺は外縁線が最も新しく、これを**SC004a新**とする。004a新は南側に幅100cm前後の**ベッド状遺構**があり（ほぼ**貼床盛土**による）、南西側はすこし北に折れ曲がって終わる。004a新には、ベッド内側の土間部北東隅角に、**カマド**の可能性が高い**SX507**がある（後述）。また主柱は不明である。004a新は、南東隅は工事

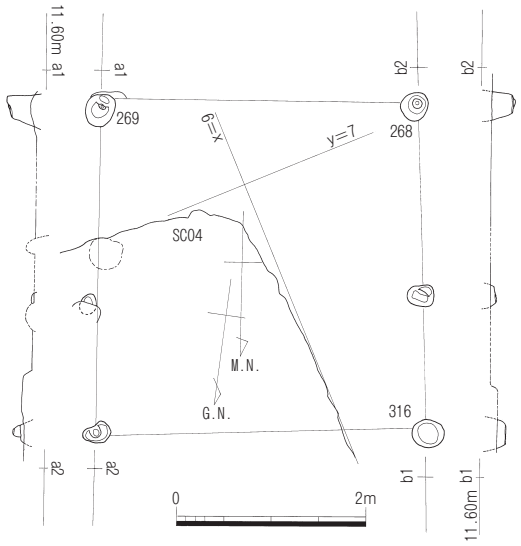


Fig.25　SB01実測図（1/80）

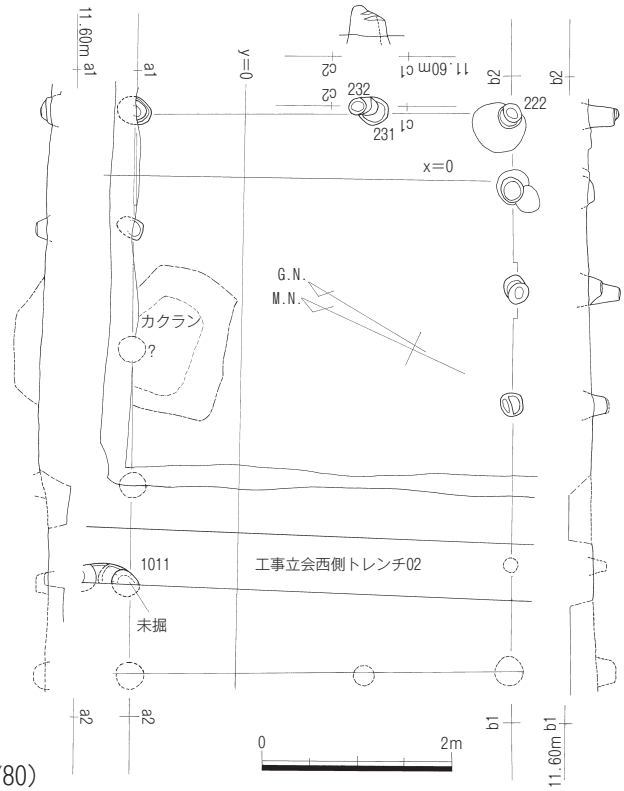


Fig.26　SB02実測図（1/80）

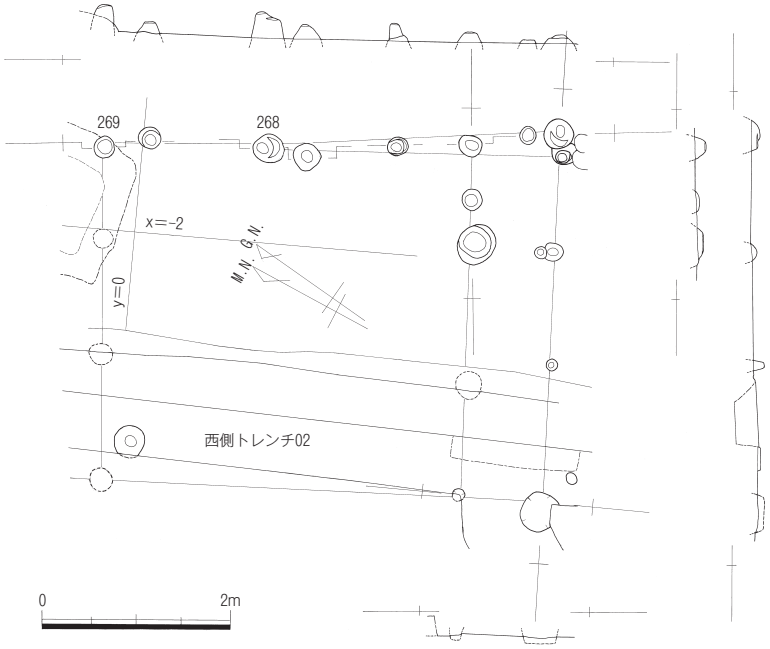


Fig.27　SB03実測図（1/80）

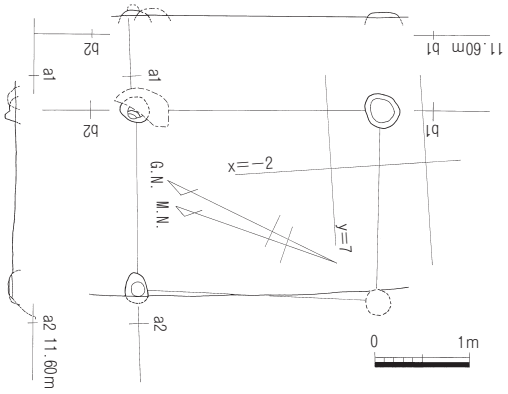


Fig.29　SB05実測図（1/80）

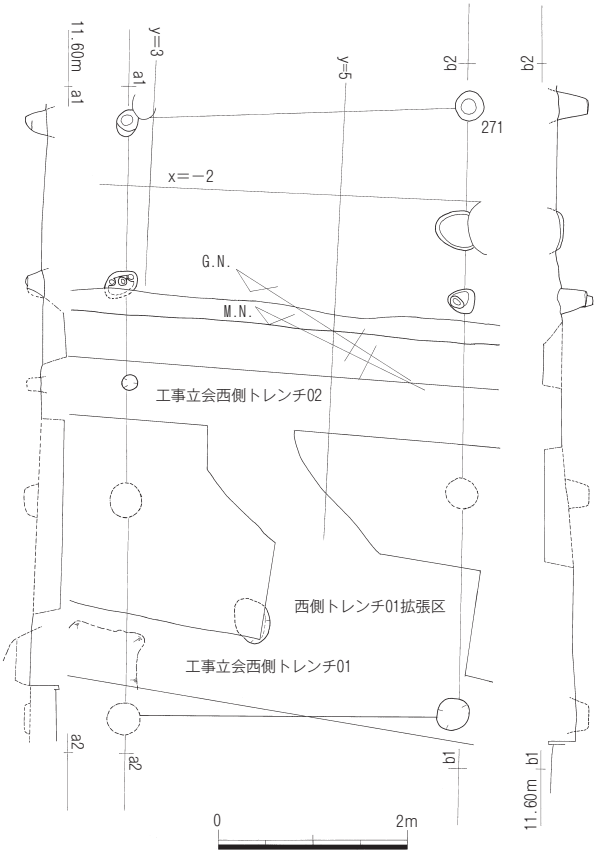
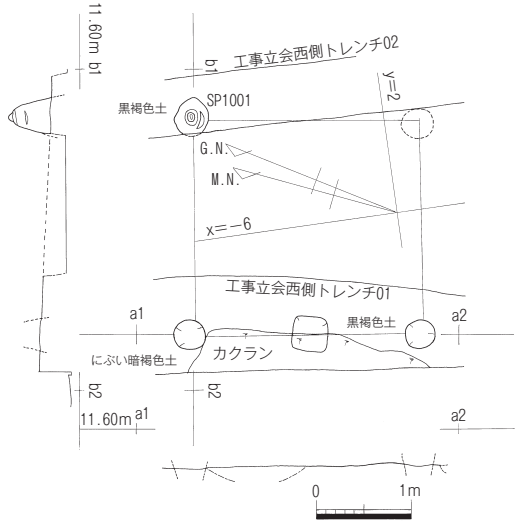


Fig.28　SB04実測図（1/80）



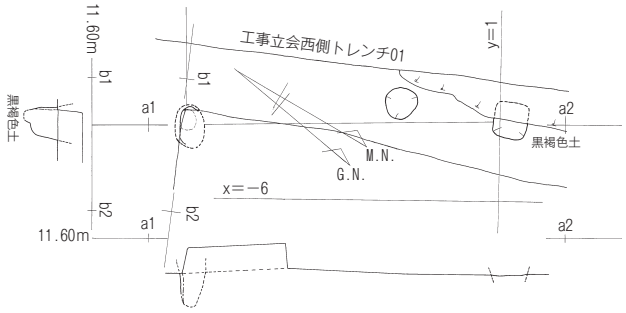


Fig.30　SB06（上）・SB07(下)実測図（1/80）

立会南東トレンチの「ホ」の部分と思われ（掘方の角がある）、北側はSC003北辺内側下部の「リ」と**炉址SX504**の南側の「チ」の遺構縁辺ラインを結んだ線であろう。南北3.75m×東西3.7～4.2（?）m（北辺がやや広いか）の小型住居となる。方位はN（真北）-25.5°-Wである。SC004にも数度の建替があるが、方位がほとんど変化していない。

次にSC004a新と南辺が一致する**SC004a古1**と**004a古2**を想定する。いずれも南東側を立会南東トレンチで確認した（PL.8-11）。**SC004a古1**はトレンチの「ホ」、**SC004a古2**は「へ」を南東隅とする。**SC004a古1**の北辺はSC003下部で検出された溝状凹みの「イ」であろう。この場合、南北4.85m×東西4.7～5.0m（北辺が広い）となる。**SC004a古2**の北辺は、立会北東調査区東側でSC007を切る「ト」

（PL.8-1）の線上と想定するが、後述のSC004cの北辺も同じだろう。この想定から、南北5.65m×東西5.7〜6.2m（北辺が広い）のやや大型の住居となる。以上の想定では、**004a古2→004a古1→004a**新の順に住居プランが縮小する変化となる。またSC003下部検出の「ロ」の凹みは、004a新のベッド南西隅からの延長線上で、これが繋がるなら004a古2の段階は西側に広くベッドがあった可能性がある。またSC004a新に伴うSX507の下部には柱穴**SP291**があり、これは**SC004a古**の**主柱**の一つとなる。対応する**北側の主柱**は（Fig.18・20に図示なし）、SC003南東下部の**SP286**（Fig.13参照、PL.6-2）と、SK508下部にある**SP575**（断面図Fig.14・15を参照）であろう。**SP575＝SC003a古1、SP286＝SC003a古2**である。

次にSC004a新のベッドと掘方西縁に、一回り小さい範囲を囲む壁周溝痕跡がある。これを**SC004b**または**SC004古b**とする。貼床盛土からなる004a新のベッドに痕跡があり、004b西辺壁溝は004a新のベッド南西側の北を区切る東西仕切溝「ヌ」に切られるので、004a新の直前時期のプランと考えられる。西辺の壁周溝痕跡は、SC004a古1の北辺西隅とした「イ」の壁周溝痕跡より北に延びないから、004bと004a古1の北辺は同じだろう。南辺が一時北側に縮小するが、全体を考えると最も矛盾がない解釈である。この場合SC004bは南北4.7m、東西は東辺が004a新か004a古1と一致するとして、前者なら3.9m前後、後者なら4.6m前後となる。最後にSC004の掘方を掘削すると、SC004a新のベッド下部からより古い壁周溝の南辺と西辺を検出した（Fig.20、PL.7-7）。これを**SC004c**または**SC004古c**とする。この西辺壁周溝の北側延長線上は、SC003下部検出の小ピットが並ぶ小溝「ハ」になる。「ハ」はちょうど、立会北東調査区のSC004a古2の北辺の延長線上で北側が止まる。つまりSC004cの北辺はSC004a古1と同じであろう。確証はないが、東辺も一致するとみる。すると、南北（4.6〜）4.9m（東辺が狭い）、東西5.0〜5.7m（北辺が広い）となる。以上の最終的な検討として、**SC004c（004古c）→004a古2→004a古1→004b（004古b）→004a新**という変遷案を掲げておく。SC004の**掘方**は、SC003に比べと全体的に**貼床**が厚い傾向にあり当初の平面と差が大きいので、掘方の平面図を別に掲載した（Fig.20）。

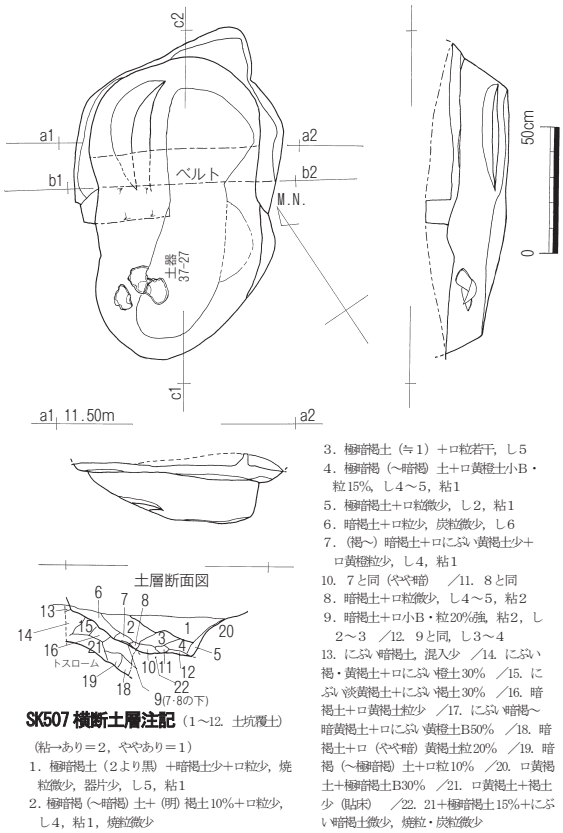


Fig.31　SK507実測図・土層断面図（1/30）

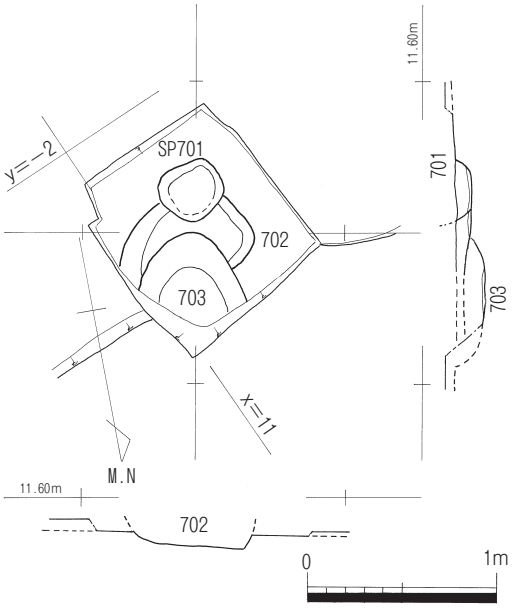


Fig.32　工事立会北側トレンチ
東部拡張区SK702・703実測図（1/40）

SC004の床面には、焼土粒や炭粒がみられる**炉址などの火処痕跡**が複数認められた（Fig.18の網掛け部分３箇所とSX509）。このうち**SX507**（Fig.22、PL.7-1〜3、裏表紙右上）は**カマドの可能性**が高い。住居覆土を少しずつ掘り下げると、ベッド内縁隅角に向く馬蹄形のローム盛土土手を検出した

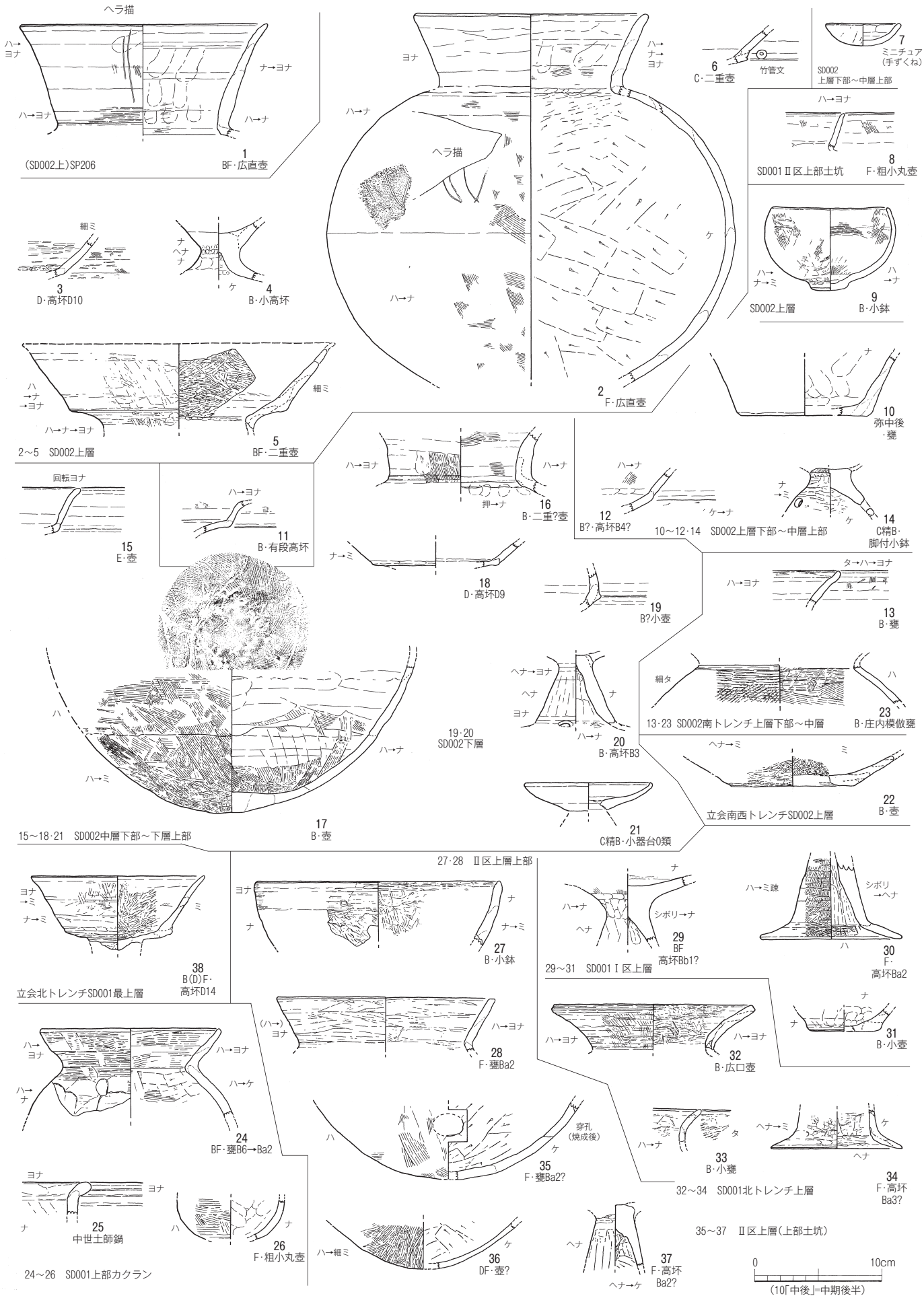


Fig.33 SD002、SD001上層出土土器実測図 (1/4)

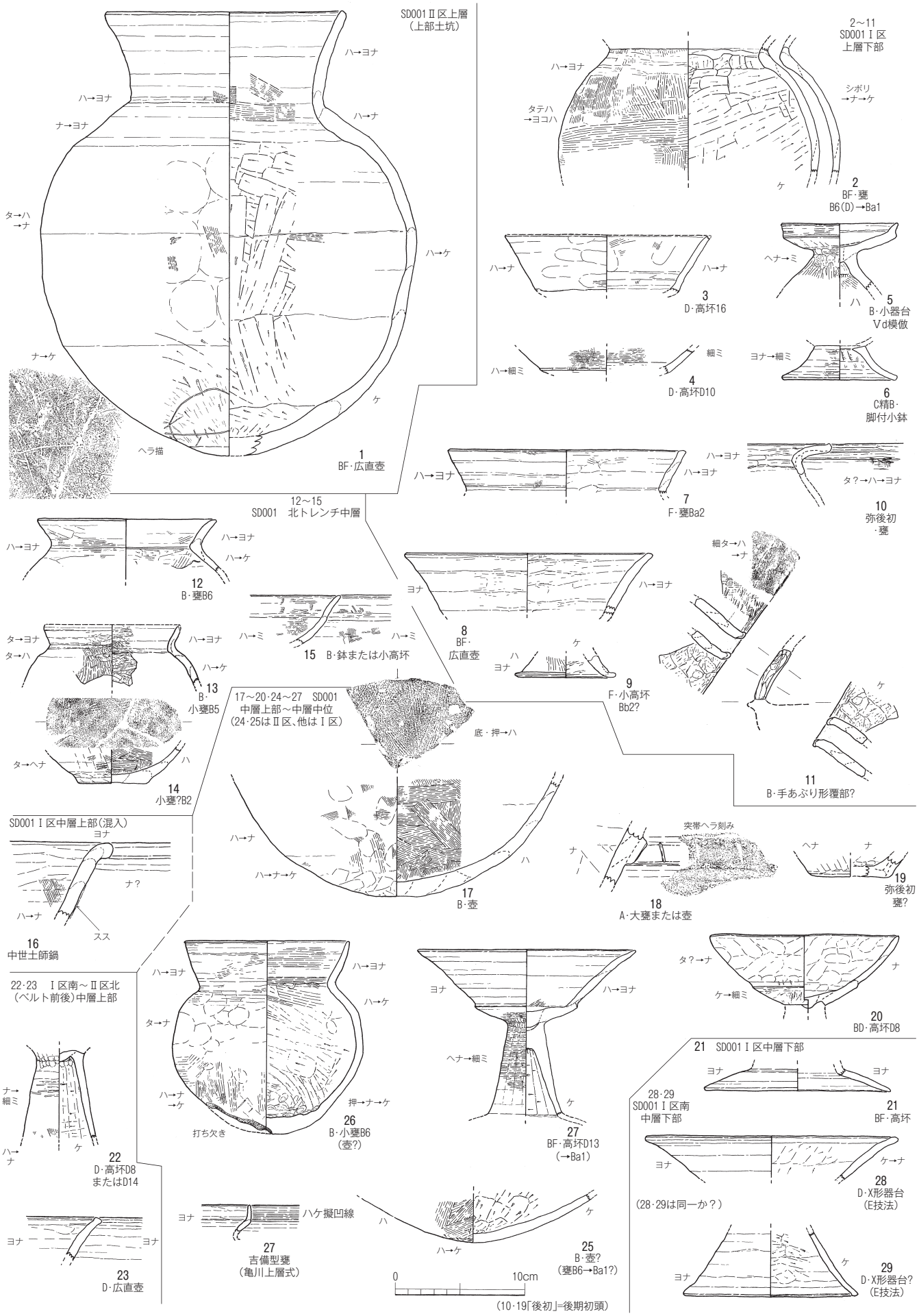


Fig.34　SD001上層～中層出土土器実測図（1/4）

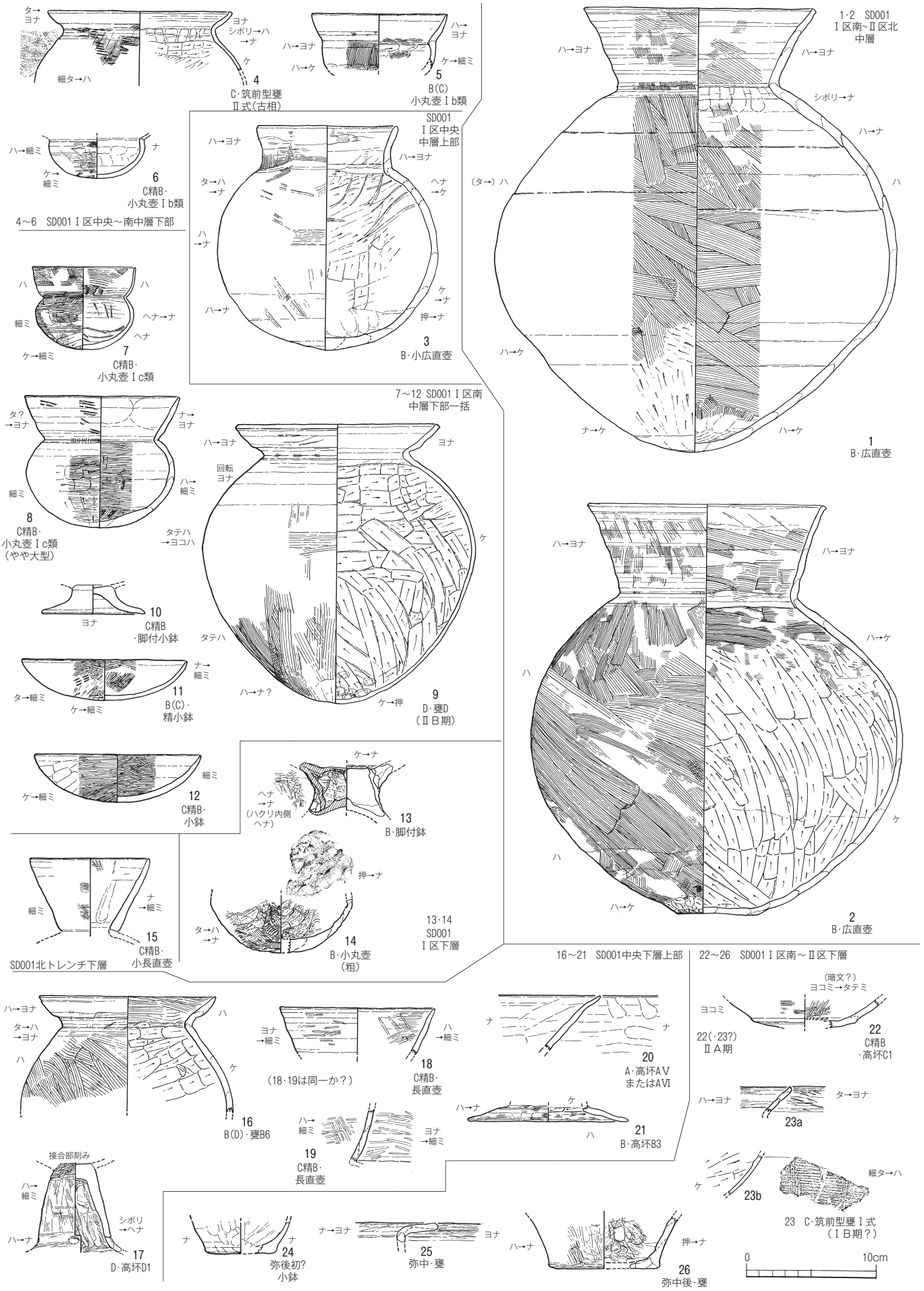


Fig.35 SD001中層~下層出土土器実測図 (1/4、一部1/3)

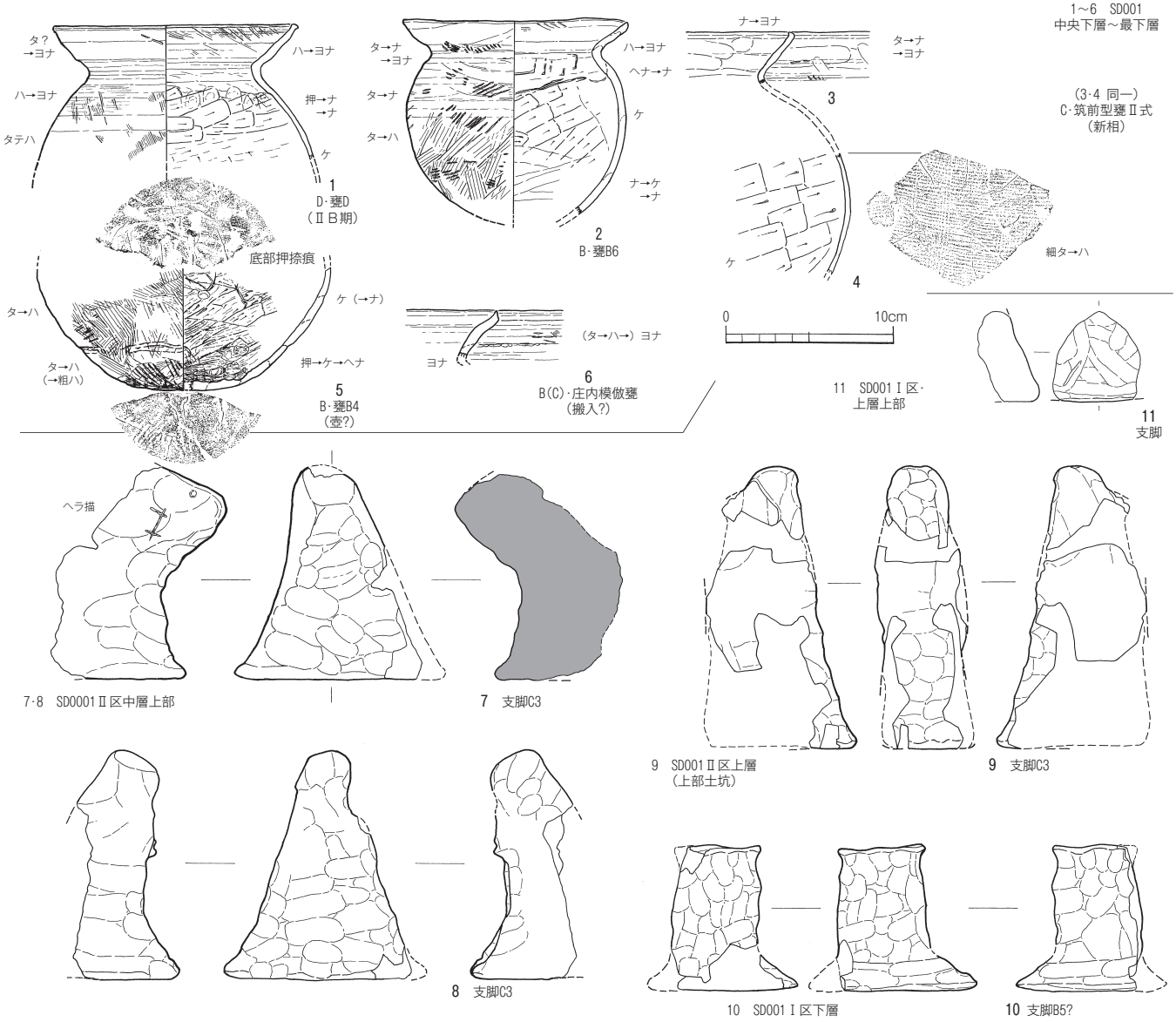


Fig.36 SD001最下層出土土器、SD001出土支脚形土器実測図（1/4）

（PL.6-7）。馬蹄形土手内側の左右壁面はややオーバーハングしており、カマドの横断面形状と同じである。ベッド隅角に向かって幅10cm前後の**小溝**が床面を走り、そのまま一段高いベッドに向かって立ち上がるが、**煙道**の下部構造だろう。馬蹄形土手の内側は明確な焼土痕跡はなかったが、内側壁面に僅かに焼土粒が認められた。おそらく火処としての使用回数が非常に少なかったために焼土層（面）が形成されなかったのだろう。

SX507の主軸延長上には、床面から山状に盛り上がった頂部に焼土と炭粒が集中する（断面図Fig.19のan-as、Fig.21のGe-Gw参照）**SX504**がある（PL.7-4～6）。床面の凹みという形式の通常の炉址とは異なるが、炉址であろう。この**一段高い炉址**とカマドの組み合わせは、他に飯倉Ｃ遺跡７次調査SC001で検出している（平成25年度調査、未報告）。その他、SX504の南側の床面凹み**SX509**（PL.7-4·5）と土間部中央西側にも焼土粒が散布し、ある時期の炉址だろう。

SC004の**時期**は、出土土器から**古墳時代初頭～前期前葉古相（ⅡＡ期～ⅡＢ期）**の幅内である。

・**SC007**（Fig.23、PL.7-10、PL.8-1～3） 工事立会北東調査区で検出。西側をSC003、南側をSC004に切られ、調査範囲の制約もあり全体の規模が分からないが、東西２ｍ以上×南北３ｍ以上である。方位は北辺の直交ラインを基準にするとN（真北）-23.5°-Wだが、ベッド内側南北線を基準とすると31.5°となる。この角度はSD001-SD002の方位に近い。西側に貼床によるベッド状遺構があるが、この途中でSC003dに切られる。予定工事の影響度から、上面確認のみで終わっている範囲が多い

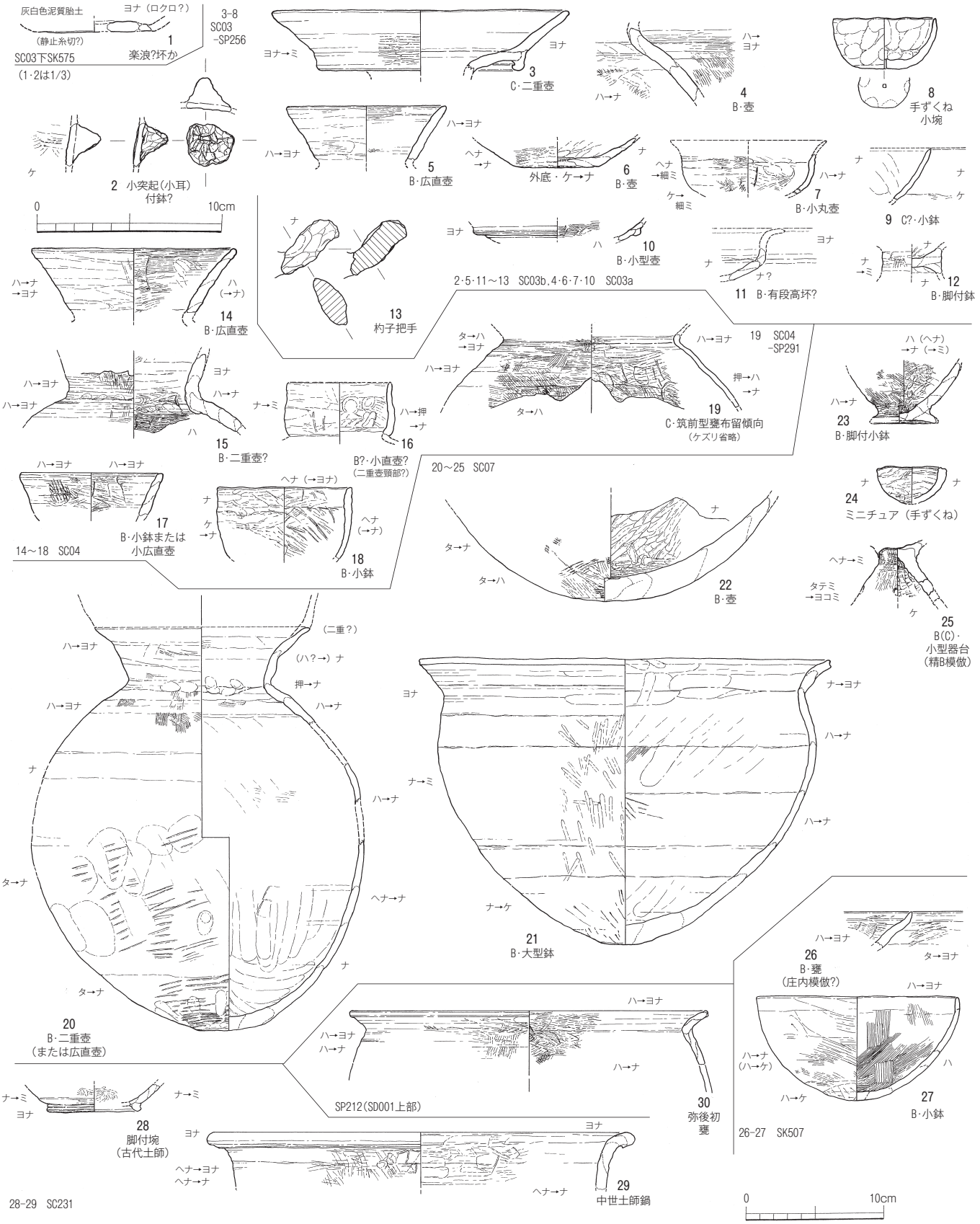


Fig.37　SC003・004・007、土坑（SK）、柱穴（SP）出土土器（1/4、一部1/3）

（Fig.3）。住居北辺に**屋内土坑SK801**があり（PL.7-11・12）、やや**多くの土器が出土**した。土坑は57×90cm前後で、床面から15cmの深さである。**時期**は、屋内土坑出土土器から**古墳時代初頭（ⅡA期）**である。

・**SC005**（Fig.24）　調査区南東、壁周溝2.2m長のみの検出で規模不明。東側に広がるとみられる。

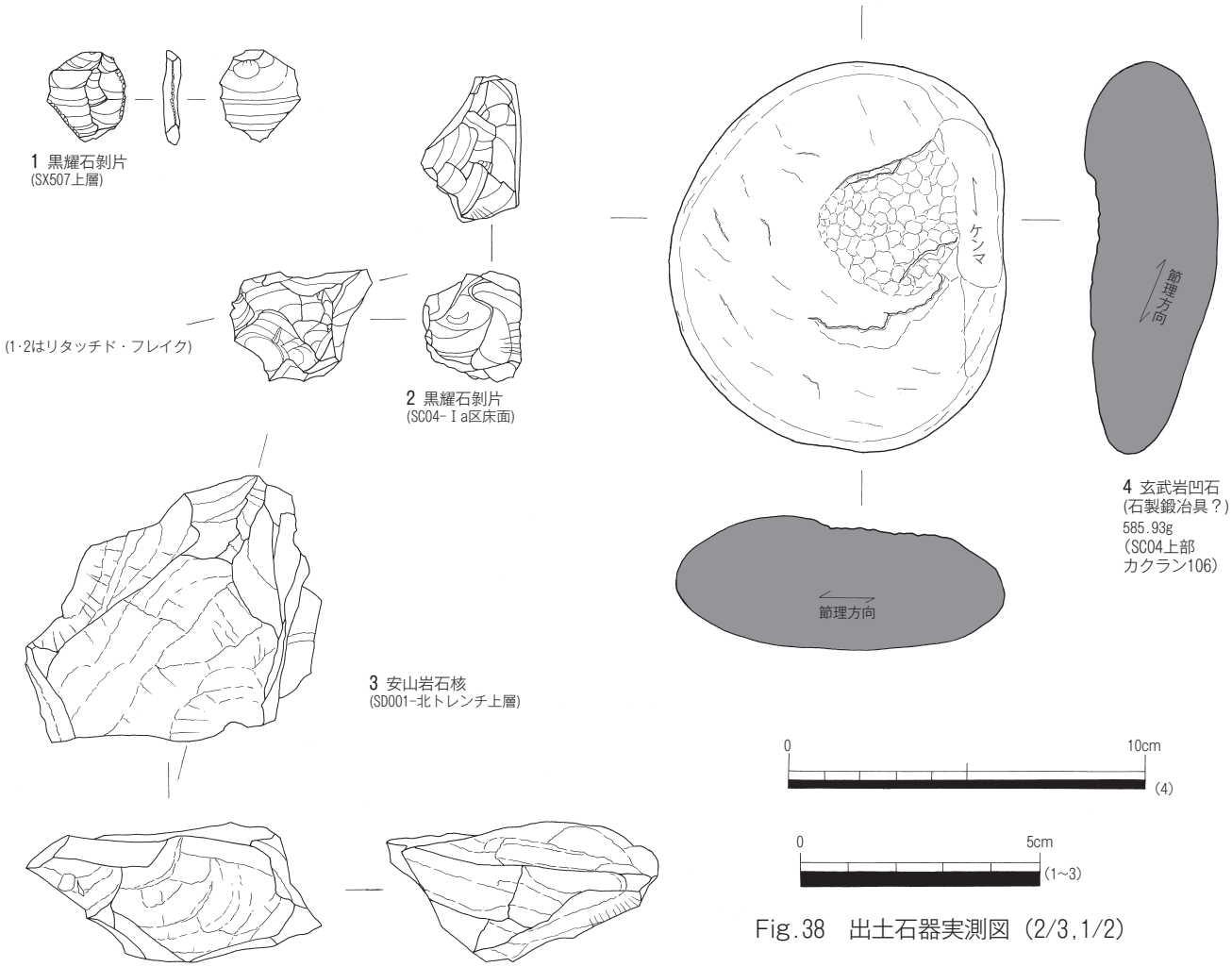


Fig.38　出土石器実測図（2/3,1/2）

方位はN-13°-WでSC003aに近く、新しいか。

（３）掘立柱建物（SB）

いずれも比較的小規模で、柱穴自体もほとんどが小さい。建物の復元は、整理過程に図上で想定したものが多い。しかし推定方形環溝内にピットが多く、仮設的な小規模建物が何度か建てられたことは認められよう。**SB01・04～07が古墳時代で**あり、**SB04～07は方形環溝に伴う**と考える。**SB01**（Fig.25）はSC04を切る１×２間（3.4×3.5m）の建物。N（真北基準）-7°-W。古墳時代か。**SB02**（Fig.26）は本調査区北西、方形区画内の２×５間（4.0×推定5.9m）の建物。N-60°-E。**SP231**に中世初期の土師器鍋片があり、**12世紀頃**か。**SB03**（Fig.27）は本調査区北西から西側トレンチ02、方形区画内の３間（以上？）×３～４間＋庇部（4.0m以上？×4.9m）の建物。N-36°-W。柱間が不揃いなことや、建物隅角前後に補助柱があり、庇部の存在などから、**中世**の建物だろう。**SB04**（Fig.28）は本調査区西側から西側トレンチ01・02まで、方形区画内の１×３間（3.2×6.4m）の建物。N-59°-E。**SB05**（Fig.29）は本調査区南西、方形区画内

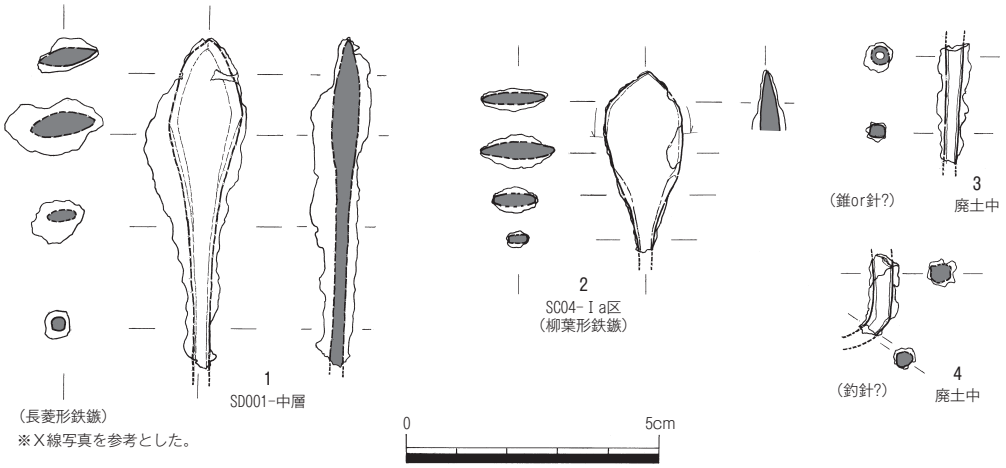


Fig.39　出土鉄器実測図（2/3）

の１×１間（1.9×2.6m）の建物。N-25°-W。**SB06**（Fig.30上）は工事立会西側トレンチ01・02北部、方形区画内の１×１間（2.3×2.4m）の建物。N-21°-W。黒褐色～暗褐色土の柱穴から構成。**SB07**（Fig.30下）は工事立会西側トレンチ01北部の２柱穴から推定。比較的しっかりした柱穴であり、西側に展開する建物の一部と想定した。１×？間（3.4×？m）。N-40°-W。

（４）土坑（SK）

SK507（Fig.31、PL.7-8・9）はSC003南東部の上から掘り込まれた土坑。80×120cmの楕円形平面、深さ33cm。横断面は西側が緩く、東側が急な立ち上がり。古式土師器の小型鉢が出土（Fig.37-27）。**SK702・703**（Fig.32、PL.8-12）は北東調査区北側の検出。両者の新旧関係は不明確だが、SK702が新しい可能性が高く、702はSP701に切られる。いずれも黒褐色～暗褐色覆土。遺物少なく時期は不明確。**SC003南東下部の土坑**（Fig.13、断面図はFig.14のbn-bsおよびFig.15のAe-Aw・Be-Bwを参照）のうち、**SK578**と**SK577**（PL.6-1）は、やや古い遺構の可能性がある（遺物は僅かで時期は不明確）。いずれも底面に柱痕跡があり柱穴と思われるが、竪穴住居の柱穴とは異なる。組み合う柱穴が不明なため、建物の一部かどうかも不明確。**SK577**は50×70cmの長方形、**SK578**は55×75cmの不整長方形、周囲の検出面からの**深さ**はSK578が約63cm、SK577が約50cm。578が新しい可能性。

３．出土遺物

以下、詳細に記述する紙幅がなく、器種や出土遺構は挿図中に記した。**土器（Fig.33～37）**については、系統・器種分類、整形・調整なども挿図中に記したが、下記の凡例と基準を参照されたい。

＜土器の凡例と編年・分類基準＞　整形・調整法の記入は略称を用いた。以下の通り。「ナ」＝ナデ、「ヨナ」＝ヨコナデ、「ハ」＝ハケメ（板目条痕ナデ）、「タ」＝タタキ、「ヘナ」＝ヘラナデ・板ナデ、「ミ」＝ヘラミガキ・研磨、「ケ」＝ヘラケズリ、「細ミ」＝細密ヘラミガキ、「細タ」＝細筋条痕タタキ、「押」＝押捺痕。「タ→ハ→ヨナ」は、タタキ→ハケ→ヨコナデを示す。ヨコナデは回転台使用と不使用があるが区別していない。またハケメやミガキも一部を除き、タテとヨコの区別をしていない。これらは本来重要で、古式土師器の「系統」類別基準になる。基本的に精製器種B群は細密なヨコミガキを、D・E系は回転台使用のヨコナデ（口縁部内外から外面頸部ないし肩部まで）や外面肩部ヨコハケを施す。これらが欠落ないし不十分（稚拙）な場合、B系ないしF系である。「広直壺」は広口直口壺、「小」は小型、「直壺」は直口壺、「二重」は二重口縁、「長直壺」は長頸直口壺、「小丸」は小型丸底、「粗」は粗製。「弥」は弥生。**古式土師器**（古墳時代初頭～中期前葉の土器）について、図中の各土器番号に付した、**A・B・C・D・E・Fは土器群の製作技法体系「系統」**を示す（久住1999）。**A系**は北部九州在来系。**B系**は畿内伝統的Ｖ様式系（変容が大きい）。**C系**は庄内式系で真正の「庄内甕」（大和型系筑前型庄内甕、一部地域で河内型系甕）を伴うB系に比べて精緻な土器群。「精製器種Ｂ群」（「精Ｂ」と略称）も含む。**D系**は布留式系だが、畿内の布留式と異なる特徴あり。高坏形態（エンタシス状脚柱状部の高坏D1など）や甕の形態変化が独自など、「北部九州型」で単純な「畿内系」ではない。精製器種はC系から引継がれ、中・大型器種は先行するB・C系器種（主に壺類、甕は筑前型庄内甕と技法融合して北部九州型布留甕となる）形態が山陰系（E系）技法を駆使して製作するものが主体となり、小型精製器種も山陰系技法による製作が現れるが、この状況は畿内の様式変化（三好玄2010）と並行している。E系は山陰系だが、北部九州ではD系土器群にC系と共に取り込まれている。「**F系**」は布留式併行後半期から（ⅢＡ期以降）、以前からのB系のD系技法の受容と、D系器種の技法退化（粗雑化）の両者の曖昧な融合により形成された古墳時代中期に続く土器群である。「**BF**」とした場合はB系要素が強いもの、「**DF**」とした場合はD系要素が強いもの。また例えば、「B（C）」とするのはB系技法によるC系器種の模倣、「BD」とはB系とD系の折衷的様相を指す。**弥生時代終末期から古墳時代前期の土器の系統、基本器種分類、編年は久住1999**による。**D系高坏**の分類補足追加と**X形小型器台**（D系）の分類は久住2002による。ただしＸ形小型器台は、精製器種B群系「A類」と、模倣品「B類」があるが、後者の大部分と前者の一部（水濾胎土＋細密ヨコミガキを伴うものあり）は山陰系技法による「B1類」と、B・F系技法のより粗雑な模倣品「B2類」を区別する。A類とB1類の区別は内面ヘラケズリの有無（後者にあり）、くびれ部内径の大小（B1類が大きい）による。「ⅢＡ期」の新古細分は、久住2002・2006参照。精製器種Ｂ群（次山淳1993）の北部九州での**小型丸底壺・鉢の分類**は久住1999・2013を参照。「Ｆ系」とした前期末（ⅢＡ期新相）から**中期に続く器種分類と編年（中期初頭以降）は、重藤輝行2002による（「重藤編年」）**。重藤編年ⅢＡ期（**中期初頭**）は、ⅢＡ期新相に後続する時期である。なお「重藤編年」の前期編年は問題が多く使用しない（久住2013）。その他、支脚分類は小畑弘己1989による。

＜参考文献＞小畑弘己1989「土製支脚について」『吉塚Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第202集／久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ／久住（編）2002『元岡・桑原遺跡群１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集／久住2006「土師器から見た前期古墳の編年」『前期古墳の再検討』第９回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集／久住2013「九州における古式土師器の地域間交流によせて～布留式中相併行期と小型丸底壺を中心に～」『古墳時代の地域間交流Ⅰ』第16回九州前方後円墳研究会発表要旨集別刷／重藤輝行2002「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器』第５回九州前方後円墳研究会発表要旨資料／次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40-2／三好玄2010「布留式土器様式構造の再検討－精製器種を中心に－」『待兼山考古学論集Ⅱ－大阪大学考古学研究室開設20周年記念論集－』

SD002（Fig.33）の上層（1～6・9）はⅢＡ期～中期初頭。上層下部～中層上部（7・10～12・14）は混在資料。南トレンチ（13、23）の甕は**肥後北部の庄内模倣甕**の搬入（36-6も同じ）。中層下部～下層上部（15～18・21）はⅢＡ期（18）からⅡＡ期（21）まで幅あり。下層（19・20）はⅡＡ期。南西トレンチ上層（22）のＢ系壺は器壁薄めの広い平底でⅢＡ期以降に多い（35-2、37-6も同じ）。**SD001**（Fig.33-24～Fig.36）の上層上部と上部土坑（33-24、33-27～30、35～37、38、34-1）は中期初頭。Ⅰ区上層下部（34-2～11）はⅢＡ期新相～中期初頭（古相混入あり）。中層上部～中層中位（34-17～20・25～27、35-1～3）はⅢＡ期新相（一部古相混入）。Ⅰ区中層下部は、ⅢＡ期古相（33-21・28・29）とⅡＢ期やや新相（35-5～12）がある。**筑前型庄内甕**（35-4・23、36-3・4）はⅠＢ～ⅡＡ期。中央下層上部（35-16～21）はⅡＢ期。中央下層～最下層（36-1～3・6）はⅡＢ期やや古相。**SC003**の二重口縁壺（37-3）はⅡＣ期で三雲端山古墳に類例。**小耳付鉢**（37-2）は**韓半島系土器の模倣**か。**SK575**の小片（37-1）は灰白色泥質胎土の**楽浪土器埦坏類**であろう。器面が荒れ残りが悪い。**SC004**の布留傾向甕（37-19）は内面のケズリを省略するが（庄内甕では稀にあり）薄い器壁。外面調整と胎土等の類似個体（内面ケズリはあり）が三雲サキゾノSC01上層にある（ⅡＡ期）。**石器**のうち**凹石**（38-4）は鉄錆が付着し、**鍛冶具台石**か？黒耀石剥片類は弥生時代前半期（38-1～3）。石器には他に細石刃剥片の可能性がある黒耀石片がある。**鉄器**のうち**長菱形鏃**（39-1）は**韓半島南部系**の可能性。「廃土中」とあるのは、竪穴住居群またはSD001・002に伴う可能性が高い。

本報告では、諸般の事情により「まとめ」（小考）を書けなかった。**20m程度の方形区画環溝**の類例は**古墳時代前期に多く**、「首長居館」とするには小規模であり、区画内建物は無いか小規模で貧弱な場合が多い。本例も含め、「**祭祀場**」が含まれるだろう。